

第3編 総長式辞

凡 例

1. 本編には、西島安則総長、井村裕夫総長、長尾真総長、尾池和夫総長、松本紘総長、山極壽一総長、湊長博総長の入学式・卒業式・修了式・学位授与式における式辞を収録した。ただし、湊総長の式辞は、2021年度入学式までを収録した。
2. 本編の構成は次の通りである。(1)第1章西島安則総長、(2)第2章井村裕夫総長、(3)第3章長尾真総長、(4)第4章尾池和夫総長、(5)第5章松本紘総長、(6)第6章山極壽一総長、(7)第7章湊長博総長。
3. (1)(2)については、『京大広報』から収録した。(3)(4)(5)(6)(7)については、京都大学ホームページから収録した。
4. 各式辞の表題及び本文の表記は典拠資料に従った。編集した際に付した注記は〔注〕で示した。
5. 2000年5月23日博士学位授与式が執り行われ、長尾総長が式辞を述べているが、3.に表示した典拠では確認できなかったため収録しなかった。

博士学位授与式〔2008年度〕

2009（平成21）年1月23日

本日、新たに119名の京都大学博士が生まれました。まことにおめでとうございます。ご列席の、理事、副学長、各研究科長、学舎長、教職員とともに、課程博士85名、論文博士34名の皆さんに、また参列されたご家族、ご友人、関係の皆様におよろこび申しあげます。今回、海外からの留学生は10名、女性の方は22名でした。

博士学位を授与されたということは、学問を志した皆さんにとって深い意味があります。今日から一生、世界のどこにいても研究者として認められるという、世界に通用する資格を得たということになります。京都大学の博士という学位に特別の誇りを持って、これからも研究に励んでいただきたいと思います。

1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、皆さんで通算、36,241名になりました。その中には、本学創立初期、1914年ごろの複数年、ノーベル医学賞候補となっていたといわれる千円札肖像の野口英世博士もいて、1911年に医学博士の学位を京都帝国大学から得ています。また、本日1月23日は、日本で初めて1949年にノーベル賞を受賞された湯川秀樹博士の誕生日でもあります。今年2009年は、湯川博士誕生103年目になります。昨年2008年の日本の学術界の喜ばしい最大の話題のひとつは、6年ぶりに日本出身のノーベル賞受賞者が同時に4名も授与されたことが挙げられると思います。

皆さんご承知のとおり、受賞者のおひとりである益川敏英京都大学名誉教授は、本学の基礎物理学研究所所長としても活躍され、本学関係者としては、2001年に化学賞を受賞した野依良治博士以来6人目の快挙となります。益川名誉教授は、1973年本学理学部物理学教室の助手時代、当時同じ教室の助手として同僚でもあり、ノーベル賞同時受賞者でもある小林誠博士とともに「小林・益川理論」を提唱し、現在では素粒子物理学の基礎となる「標準理論」として世界中の物理学者に認められ大きな功績をあげたことが評価されています。この受賞の対象論文となった「小林・益川理論」は、湯川秀樹博士が創刊した「Progress of Theoretical Physics」に掲載されたものです。同誌は、本学基礎物理学研究所と日本物理学会が発行しており、今回の受賞により、日本にもノーベル賞を生みだせる雑誌があることを国際的にも示すこととなりました。また、湯川博士、朝永博士以来続く京都大学の基礎物理学分野での研究力の底力と伝統がよい形で継承されている好例と思われます。

私は、昨年12月上旬、益川名誉教授に同行し、ノーベル賞授賞式典にも参加させていただきました。スウェーデン滞在期間中、カロリンスカ研究所等の関係学術機関を訪問したり、ノーベル賞関係者達に京都大学におけるこれまでの研究内容と研究者の活動などを併せて紹介してきました。

その中には、一昨年、世界で初めて iPS 細胞の樹立に成功した本学、山中伸弥教授による研究、免疫学の第一人者である本庶佑名誉教授などの業績、また、フィールズ賞受賞者、ラスカー賞受賞者など世界的に評価の高い京都大学・日本人研究者の多くの業績についても紹介させていただきました。

昨年のスウェーデン、ノーベル賞授賞式典訪問を通じて感じたことのひとつは、日本における研究、そして京都大学における研究は、決して欧米諸国にひけをとらない内容を持っており、本学が世界最高水準の研究環境と学問の源流を支える基礎研究領域では、さらに大きな強みを発揮していることでもあります。このことを踏まえながら、今後、皆さん方の研究分野においても大きな自信をもって、研究の未来を開拓していただきたいと思えます。

今後の日本と京都大学が世界に果たすべき役割を考えると、本日、博士学位を得られた皆さん一人一人が自分から新しい道、新しい考え方を創り出す気概「自我作古」を胸に、大いに自分達が未来を創ってゆくのだと信念と自信を持って欲しいと思えます。皆さんの研究活動について、今後も地域や世界の各地に発信する努力を継続していただきたいと思えます。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任いたしました。2004年の国立大学法人化以来、京都大学は、激動する社会構造変化の渦の中にあり、大きな変革の時代を迎えています。2009年は法人化後6年目に当たり、第一期中期計画の最終年に当たりますが、来年2010年からは、向こう6ヶ年の第二期中期計画年に入ります。現在、新たな中期計画に向けた準備作業を新執行部とともに進めています。その中では、皆さんのような優秀な博士学位取得者に対する支援策のひとつとして、次世代の指導的教員育成と若手教員ポストの増設を目指す「白眉プロジェクト」の展開、共同参画社会形成のための女性教職員登用や外国人教職員の積極的登用と勤務条件や環境の整備も目指しています。

このほか重点事項として、博士課程在籍者に対する経済的支援策の充実、各学術分野におけるトップレベル研究の推進、基礎学術を重視した財政支援の充実、国際・国内共同研究と産官学連携の積極的展開、大学基金の体制整備、同窓会組織の活性化策などを推進することを目指しています。特に、京都大学の国際的地位の向上のための施策充実、グローバルスタンダードの研究拠点総合大学としての施策、これからも、魅力・活力・実力ある京都大学を目指しながら、教育・研究環境をさらに充実させたいと考えています。

私は、人生を木にたとえることができます。大木が育つには、肥沃な大地が必要です。土壌を富ますことなく、外見のみを整え、栄養を与えるだけでは大木は育ちません。自らをさらに肥沃な大地とするために、また人間力を豊かなものとするためにも、単に研究領域の専門に留まらず、これまで以上に皆さんが自身を広く深く耕していただきたいと思えます。皆さんが、京都大学の博士として、凜とした気概をもち、既成概念にとらわれない

課題を自ら発しながら、課題解決への道程を切り拓いていかれることを総長として願っています。

最後になりましたが、本日、博士の学位を得られた皆さんは、これからさらに学問の世界に進んで、世界を驚かすような研究成果を発表する可能性を持っています。また、社会人として新たな職場で目覚ましい活躍をされる方もいると思います。今日の学位授与に至る過程での経験を活かしながら、さまざまな形でご活躍を祈っています。また、皆さんが学位論文をまとめる過程で得た多くの知識を広く市民に伝えることも、皆さんにとってこれから大きな仕事になるということも忘れないでいただきたいと思います。さらに、学位を得られるまでの研鑽の中で、多くの支援を惜しまなかったご家族、友人の皆様には、心からの感謝を申しあげたいと思います。

皆さんが、これからも世界の平和と人類の福祉に貢献するという基本を忘れることなく、こころを研ぎ続け、からだの健康を大切にして、大いなるご活躍を願って、お祝いの言葉いたします。

本日は、まことにおめでとうございます。

修士学位・修士（専門職）学位・法務博士（専門職）学位授与式〔2008年度〕

2009（平成21）年3月23日

本日、京都大学修士の学位を授与された2,123名の皆さん、修士（専門職）の学位を授与された124名の皆さん、法務博士（専門職）の学位を授与された187名の皆さん、誠におめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、名誉教授ならびにご列席の副学長、部局長、教職員とともに、皆さんの学位取得を心からお祝い申し上げます。

人間健康科学修士、薬科学修士は今回が初めての授与となります。

これまで京都大学が授与した修士の累計は、皆さんを含め、59,110名、修士（専門職）の累計は326名、法務博士（専門職）の累計は、701名になりました。皆さんは、私が総長として初めて世に送り出す修士・専門職修士・法務博士となります。また、本日この学位授与には、607名の女性と142名の海外からの留学生が含まれています。

皆さんにとって修士課程の2年間はどのような日々だったのでしょうか。修士課程修了のいま、自らを振り返るということは非常に大切なことです。フランスの作家アンドレ・モーロワはこう言っています。

「精神というものは、時々洗い清めて、新しく繕いなおすことが必要である。」

これまでには嫌な思い出、苦しい経験やほろ苦い失望もあったでしょう。これについてもモーロワは、「忘却なくして幸福はありえない」とも言っています。とても味わい深い言葉です。自己の修士課程での学問研究とともに、人間として自分はどのくらい成長したのだろうかと問うてみるよい機会だと思います。

学部の4年間は教養教育および専門分野の基礎教育の学習が中心であるのに対して、大学院修士課程は、自らが選んだ専門分野をさらに深く修め、その分野の専門家として自立しうる人材となる教育を受けたところです。しかし単に専門的知識を身につけたというだけでなく、専門的知識を身につけた人の果たすべき責任も負わねばなりません。すなわち、いろんな局面において、社会を導く専門家の卵として適切な判断を行い、発言し、また行動しなければなりません。こういったことは、真理や学理の探求を旨とする研究を通じて、一定程度、可能となってきたことと思いますが、修士修了のこのときに、それぞれが自身に厳しくそのことを問うていただきたいと思います。

修士課程において、教育を通じて多様な知にふれ、さらに最先端の研究を自ら実践することで、新たな課題をいかに設定すればよいのかという課題設定能力や、それを解決するためにどう取り組めばよいのかという問題解決能力を身につけられたことと思います。すなわち、この度、皆さんに授与された学位は、専門家の登竜門をくぐり抜けたということの証なのであります。

皆さんのなかで約4分の1の人は、これからさらに研究者や専門家になるべく、博士課程に進むことを選択され、残りの皆さんは社会で活躍することを選択されました。いずれの道に進もうとも、本学の修士課程で学んだことを基盤にして、それぞれの道で果敢に挑戦し、凛

とした気概を持って、活躍していただきたいと思います。

本日の修了式にあたり、^{ほなむけ}「驢」として皆さんに三つの言葉をお贈りします。

一つ目は、「自得自発」という言葉です。1897年、京都大学初代総長の木下廣次先生は、京都大学の初めての入学宣誓式において

「大学々生に在ては自重自敬を旨とし以て自主独立を期せざるべからず。故に諸君は既に後見を脱したる者として吾人は諸君を遇する也。因て平素の事は細大注入の主義に依らず自得自発を誘導することを務めんと欲す」

と述べておられます。木下初代総長の式辞のこの言葉が、今でも変わらず京都大学が大切にする自由の学風のひとつの源なのです。これからの困難な時代にこそ、自得自発を旨とし、自主独立を重んじ、自ら問いを発し、常に挑戦していただきたいと思います。

二つ目は、「自鍛自恃」という言葉です。自鍛とは自らを鍛え、自恃とは「自らに^{たの}恃むべし」ということで、江戸時代の昌平坂学問所の名塾長として知られる佐藤一斎は「士は当に己に在る者を恃むべし」と述べています。これからも多くの試練や困難が皆さんを待ち構えています。困難を厭わず、困難を乗り越えて、それを自らを鍛えるチャンスと捉えてみてください。今まさに米国発の未曾有の金融危機・経済不況にみまわれ、基本的な価値観や労働観、そして私たちの生活環境が大きく揺れている状況です。日本が培ってきたものづくり技術の伝統や、高い科学技術力、共生を重視する「和」の考え方、そしてその中で生まれてきた価値観の良い面、強い面を今一度思い起こすときが来ているように感じます。新しい価値観を見出し、生活の質を問い直すような、考え方の大転換が必要な時代に我々は生きているのです。この困難な状況においても、自由な発想のもと、皆さんには日本あるいは世界で指導的な役割を果たしていただきたいと思います。

三つ目は、「楽天知命」という言葉です。天与の才や境遇を楽しみ、天から自分に課せられた使命や運命を知るということです。これは易経の「自由に生きて流されず、天を楽しみて命を知る。さすれば憂うことはない」という考えで、詩人白居易はこの言葉を好み、自らを白楽天と称していました。私の総長就任直前に、長尾 真元総長からこの「楽天知命」と揮毫された書をいただきました。困難な時代でも、先人の教えに習い、己を信じ、仕事や文化や生活を楽しむゆとりを持つことは大切だと思います。

最後になりましたが、112年の歴史のもと、京都大学では、個性豊かな「彩なす (colorful な) 人材」が、綾織 (warp and woof) の如く縦横に結ばれた「綾なす人間模様」をなし、その特徴としています。また、文化、文人、人文に使われる「文 (ぶん)」は学問、芸術、教養を表す「あや」とも読めます。この「文 (あや)」も京都大学の学問の源流であります。京都大学ではこの三つの「あや」が混然一体となって、独特の雰囲気を生み出してきました。この「あやなす大学」京都大学と、千二百年の歴史都市、京都において学んだことを日々の生活の中に活かして、人生を生き抜いてほしいと思います。

皆さんが人生の困難に直面したとき、一層の知識や経験が必要となるでしょう。その場合には、皆さんが学んだこの京都大学を思い出してください。そして気軽に大学を訪れてください。京都大学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。この大学で出

会った多くの友人や教職員が人生の基軸として皆さんの力となることを忘れないでください。

本日学位を得られた2,434名の皆さんが、それぞれの目的に合った場所を見つけ、自らの学習や研究の成果を生かして、いきいきと活躍することを願い、私のお祝いのことばとします。

本日は、誠におめでとうございます。

博士学位授与式〔2008年度〕

2009（平成21）年3月23日

本日、新たに571名の京都大学博士が生まれました。誠におめでとうございます。ご列席の理事、副学長、部局長、教職員とともに、課程博士517名、論文博士54名の皆さんに、また、参列されたご家族、ご友人、関係者の皆様に心よりお慶び申し上げます。今回、海外からの留学生は76名、女性は101名でした。

本日、この場所で博士学位を授与されたということは、学問を志す皆さんにとって、非常に深い意義があります。これから一生、世界中のどこにおいても第一線の専門家、研究者として通用する証をめめたく獲得されたという特別な瞬間が本日この時なのです。京都大学の博士という学位に格別の誇りと気概を持って、これからも研究に一層励んでいただきたいと思います。

1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、皆さんで通算36,812名になりました。その中には、千円札の肖像でおなじみの野口英世博士も含まれます。野口博士は1911年に35歳で医学博士の学位を京都帝国大学から得ている、皆さんの先輩なのです。

昨年、2008年の日本の学術界の慶事のひとつは、ノーベル賞が同時に4名の日本人に授与されたということでした。皆さんご承知のとおり、受賞者のおひとりである益川敏英京都大学名誉教授は、本学の基礎物理学研究所所長として長年活躍され、本学関係者としては、6人目のノーベル賞受賞の快挙となります。益川名誉教授は、1973年本学の理学部物理学教室の助手時代、当時同じ教室の助手であった小林誠博士とともに「小林・益川理論」を提唱されました。この理論は、現在では、素粒子物理学の基礎となる「標準理論」として世界中の物理学者に認められています。1949年に日本初のノーベル賞を受賞された湯川秀樹博士、そして朝永振一郎博士以来続く、京都大学の基礎物理学分野での研究の底力と伝統がよい形で継承されています。また、受賞の対象論文となった「小林・益川理論」は、今から30年以上前の業績が評価されており、お二人にとっては20歳代後半から30歳代にかけての業績であり、新しい発想に恵まれやすい年代での仕事であります。本日、博士学位を取得された多くの皆さんとも年齢的にはあまり違わない年代での業績であり、その点から、皆さんにも、ますますの自己研鑽に努め、研究の最前線で、諸先輩に続いてすばらしい成果をあげていただくことを期待しています。

私は、昨年12月上旬、益川名誉教授に同行し、ノーベル賞授賞式典に参加する機会を与えられました。スウェーデン滞在期間中、カロリンスカ研究所等の関係学術機関を訪問しました。その折、ノーベル賞関係者や式典に参加していた各国の方々に京都大学や我が国の優秀な研究者の研究内容や研究活動などを紹介してきました。一昨年、世界で初めてiPS細胞の樹立に成功した本学の山中伸弥教授をはじめ、フィールズ賞受賞者、ラスカー賞受賞者など世界的に評価の高い、京都大学日本人研究者の業績を紹介できたことは大きな喜びでした。世界的な研究開発競争、人材争奪が激化しています。京都大学は、世界的な研究拠点としての役割を十分に果たせるよう、これからも成果の出つつある研究に対しては支援を強化し

たいと考えています。

このノーベル賞授賞式典への列席を通じて、強く実感できたことがあります。それは、日本の研究、そして京都大学の研究は、欧米諸国をはじめとする世界の中で、決してひけをとらない内容を持っており、とりわけ学問の源流を支える基礎研究領域においては、本学が大きな強みを有していることです。江戸時代に活躍した京都丹波出身の学者の石田梅岩は「心を研く」ことを説き、「一度、自らを疑い、本を務ること要なり」と述べています。日本と京都大学が世界に果たすべき今後の役割を考えると、本日、博士学位を取得された皆さんには、「こと」や「もの」の大本つまり本質を見つめ、本を務るの学、すなわち「務本の学」を心得、一人、一人が自分から新しい道、新しい考え方を創り出す気概を持ってほしいと思います。福沢諭吉が中国の「宋史」から引いてよく使った「自我作古」つまり自分が歴史を作り出すという考え方は広く知られています。先日、京都大学が名誉博士号を授与いたしましたAlan Kay博士と対談してKay先生と私で大いに意気投合したのも「未来は予測するものでなく、自分が創り出してゆくものだ」ということでした。また、イギリスのヴィクトリア時代の宰相かつ小説家であったベンジャミン・ディズレーリは「境遇が人を創るのではない。人が境遇を創るのだ」とも言っています。このように、皆さんも未来を自ら切り開く強い信念と自信を持ってほしいと思います。そのために研究の方向をよく考え、研究成果については、今後も地域や世界の各地に発信する努力を継続していただきたいと思います。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任しました。2004年の国立大学法人化以来、京都大学は、激動する社会の構造変化の渦中にあり、大きな変革の時代を迎えています。2009年は、法人化6年目にあたり、第一期中期計画の最終年にあたりますが、来年、2010年からは、向こう6ヶ年の第二期中期計画期間に入ります。現在、新たな中期計画に向けた準備作業を新執行部において進めています。その中には、優秀な博士学位取得者に対する支援策の一環として、次世代の指導的教員育成と若手教員ポストの増設のために「白眉プロジェクト」創設を考えています。また多様な視点からの共同参画社会形成のための女性教職員登用や京都大学の国際化をはかるために、外国人教職員の積極的登用と勤務条件や環境の整備も盛り込んでいます。

私は、資源に乏しく、知識や技術によって未来を創り出すために科学技術立国の推進が必要な日本において、常々残念に思っていることがあります。それは社会問題となっているオーバードクター問題に象徴されているように、日本社会が博士号取得者をうまく活用できていないのではないかとことです。これは確かに社会だけに問題があるわけではありません。博士号取得者自身や博士を養成する私たち大学の側にも責任の一端があります。しかし、研究によって自らを鍛え上げてきた優秀な人材をうまく活用し、新しい価値を創りつづけていく社会の仕組みを整えていくことが、これからの日本には一層必要とされるのではないのでしょうか。その意味で、理系文系を問わず、本日学位を取得された皆さんの各方面での活躍に大いに期待するとともに、理系の方々のみならず、文系の方々も科学技術をよく理解し、それを社会システムに取り込む、人間そのものに生かすという努力をしてほしいと願っています。高い教養と専門知識を身につけた博士号取得者が社会の中で大きく羽ばたけ

る社会の実現に向けて、大学からも積極的に提言をしていきたいと考えています。

私は、人生を樹に例えることができると考えています。大樹が育つには、若い時代に衍沃な大地で大きく根を張り、たっぷりと栄養をつける必要があります。肥沃な大地は大学であり、これから皆さん自身が作り上げる境遇です。その土壌を富ますことなく、外見のみを整え、栄養を与えるだけでは、大樹は育ちません。自らにとって必要な衍沃な大地を創り出すために、また人間力を豊かなものとするためにも、単に専門とする研究領域を深く耕していただくだけでなく、自分自身が広い視野と深い教養を身につけ、これまで以上に皆さん自身を鍛えていただきたいと思います。皆さんが、京都大学の博士として、凜とした気概をもち、既成概念にとらわれない「問い」を自ら発しながら、課題解決への道程を切り拓いていかれますように願っています。

最後になりましたが、学位を得られるまでの研鑽の道程において、支援を惜しまれなかったご家族、ご友人の皆様には、心からの感謝を申しあげたいと思います。

本日、博士の学位を得られた皆さんの中には、これから学問の世界でさらに研究を進める方、また、社会人として、新たな職場で活躍をされる方などがおられると思いますが、これからも学術や会得した知識、智恵を通して、世界の平和と人類の福祉に貢献するという基本を忘れることなく、こころを磨き続け、健康に留意され、ますますご活躍されんことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございませう。

卒業式〔2008年度〕

2009（平成21）年3月24日

本日、卒業される2,767名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、尾池和夫前総長ならびに名誉教授、ご列席の副学長、学部長、部局長とともに、皆さんのご卒業を心からお祝いたします。あわせて卒業生をこれまで支えてこられたご家族ならびに関係者の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

京都大学の卒業生はこれまで世界中で活躍してきましたが、皆さんを含めて卒業生の累計は、京都大学の112年の歴史において、182,538名となりました。皆さんには、およそ18万名の先輩がいることになります。

社会人として活躍する道を選ばれた皆さん、進学して学問の道を究めようとする皆さん、さまざまな道へ、今、第一歩を踏み出そうとしている皆さんは、それぞれの感慨にひたっていることと思います。皆さんの多くは、2004年4月に京都大学が国立大学法人となった後、2005年の入学生になりますが、本学においては法人化後、すでに激動の5年目が過ぎようとしています。皆さんにとっては、4年間あるいはそれ以上の年月を過ごしたこの京都大学が、明日からは母校になります。今日、大学の門を出るとき、歩みを止め、皆さんが学んだ大学を振り返ってみてください。皆さんのなかに、4年間の思い出が鮮やかに蘇ることと思います。

私は、大学が皆さんの人生の基軸になるよう願っています。皆さんは、卒業した後も多くの試練に直面することと思いますが、そのときには、大学で教えた先生や先輩、ともに学んだ友人との議論を思い出してください。そこから試練打開の展望やアイデアが得られることと思います。

英語では卒業式を、開始を意味するcommencementと呼ぶように、卒業は同時に新たな旅立ちを意味します。社会人として旅立つにせよ、進学するにせよ、この卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんがときには母校を訪ね、語らう場として、同窓会活動の場として、生涯の学習の場として、京都大学を人生の基軸とし、積極的に活用していただけることを総長として願っています。

卒業にあたり、私から皆さんに^{ほなむけ}「驢」の言葉をお贈りしたいと思います。それは、「自鍛自恃」です。「自鍛」とは自らの心と身体を鍛えてほしいということです。あのレオナルド・ダヴィンチでも「老年の欠乏を補うに足りるものを青年時代に身につけておきなさい。知恵を必要とするということを理解したら、老年に至って栄養失調にならぬよう、若いうちに勉強しなさい。」と言っています。自恃とは「自」と「矜恃」の「恃」の二文字であり、「自らに^{たの}恃むべし」ということです。江戸時代の昌平坂学問所の名塾長として知られる佐藤一斎は「士は当に己に在る者を恃むべし」と言っています。他人に頼る前に、自らの内にある己自身に恃むのが筋道であると言っているのです。卒業後、これからも多くの試練や困難が皆さんを待ち構えていると思います。困難を厭わず、困難を乗り越え、それを自らを鍛えるチャ

ンスと捉えて、恃みとなる自己を磨いてほしいと思います。また、若いときの苦労は成長の糧となります。自らを鍛え、自らに恃むべしを心がけてください。

本年は十干、十二支では「ツチノト、ウシ即ち己丑（キチュウ）」の年に当たります。十干の「己（キ、ツチノト）」は曲がりくねった糸の端を表し、乱れた糸をほぐし、糸筋を直し、乱れを正す年を意味するそうであります。また「ツチノト」も十二支の「丑（チュウ、ウシ）」も梢の先の芽が伸び、芽が曲がりつつも伸びようとする様を表し、新しいことが起きることを予感させます。したがって「ツチノト、ウシ」に当たる今年は、まさに金融危機に端を発した混沌、混乱から脱出し、正しい方向に向けて出発する年であります。また「丑」の文字がカタカナ「ユ」と「メ」の合成のように見え、「ユメ」とも読むことができ、新しい夢も暗示しています。皆さんには、将来へ向かって「おおいなる夢」を抱き、浮かれていた世の中を見直し、「牛歩」のごとく確実に歩を進める年となるよう、努力して行ってほしいと思います。

私は、地球だけの閉じた経済圏では、資源、食料、水、エネルギーなどの供給難に陥り、早ければ40年後に、少なくとも100年以内に安定的な成長や人類の生存でさえ難しくなるとこれまで指摘してきました。人類の未来には地球温暖化、環境、食料、資源問題が待ち構えています。最近、持続可能性（サステナビリティ）がもてはやされていますが、サステナが人口に膾炙すれば、まるで中世時代の免罪符のように、困難が簡単に克服できるというイリュージョンを人々に与えかねないということを心配します。事態はもっと深刻なのです。そこで、私は人間社会の「サステナビリティ」よりも人類の「サバイバビリティ」こそ、今考えるべきと思っています。その観点で世界を眺めてみると、個人、組織、地域、国、世界の様々なレベルで生存が問題となる大競争時代が既に始まっています。環境や資源、エネルギーなどに関し、生存を支える科学技術の開発が問題解決に間に合うかどうか、そのスピードが極めて重要です。高い技術と勤勉さは我々日本人の美德です。それらの美德を持った日本人が、これから世界に打ち勝てるのは環境やエネルギーの技術の分野だと思っています。私は省エネや節エネに加えて、低炭素社会の中で安定的にエネルギー源を確保する、有望な宇宙太陽発電所にも興味を持って研究開発に取り組んできました。今のロボット技術や半導体技術、太陽電池技術や電波技術を活かせば、宇宙に発電所をつくることも可能です。太陽系を利用する技術をつかめば、地球という制限の中で行き詰まっている人類の将来は明るいとは私は見えています。しかし、ここで注意しないといけないのは、サバイバビリティに取り組む際、弱肉強食の世界になってはいけないということです。科学技術の知識だけに頼り、過信してはならないのです。人文学や社会科学の知恵も動員し、人々が犯しやすい欲の暴走を抑え、環境権、生存権、人間権なども十分に考慮し、共生を重視する日本の和の発想を基にした「生存学」を創生していく必要があるのです。科学技術による生存の基盤を支える「生存基盤学」を通じ、世界の生存を保証することを考え、あわせて共生を基礎とする和の精神を活かすことが、世界のサバイバビリティの実現に役立つのではないかと考えています。現代の社会は個人の能力と欲望、そして社会の能力で発展してきましたが、欲望の独走を許したことが今の金融危機の背景にあると思います。それらの問題を克服できるかどうかはわ

かりませんが、人間の暴走を人文学や社会科学の知恵や文化で防ぐ必要もあるのではないのでしょうか。本日卒業される皆さんには、京都大学の卒業生として、人類の生存のために日本、いや世界で指導的な役割を果たしていただきたいと思います。

最後になりましたが、卒業して社会で活躍される皆さんには、様々な場所で京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍され、さらに皆さんの母校である京都大学で学問を続ける研究者たちの応援もお願いいたします。また、約6割を占める皆さんは、修士課程に進学され、引き続き大学で研究を続けることとなりますが、私は、京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように改革を続けたいと思います。

シモーヌ・ボーボワールは「人間の条件は、与えられしものを悉く越えてゆくことである」と言っています。卒業の機会のみならず、今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、からだところのバランスを大切に、ご活躍されることを願い、京都大学学士の学位を得られた皆さんへの私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業おめでとうございます。

学部入学式〔2009年度〕

2009（平成21）年4月7日

大きな可能性に瞳を輝かせ、この場に臨まれた3,006名の皆さん、京都大学にご入学おめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長とともに、今日の佳き日をお祝いしたいと思います。京都大学に入学するまでに、皆さんは、様々な長く厳しい受験の道を辿ってこられたことと思います。敬意を表したいと思います。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも、心よりお祝いを申し上げます。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任いたしました。皆さんは、私が総長となって初めてお迎えする学部入学生です。今年は、入学式会場をこれまでの吉田キャンパス内の総合体育館から、ここ平安神宮前の「みやこめっせ」に移しました。今回がここでの初めての入学式となります。

さて、入学された皆さんに第一に申し上げたいことは、本学の教育と研究の理念です。本学を受験されるにあたり、大学が定めている理念をすでに読まれていると思いますが、本学の理念は、「京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める」となっています。この理念の根底にあるものの一つは、「自主自律」の精神であり、それは、本学の学生諸君には、一人の成人として自らに責任を持ち、自ら主体的に勉強と研究を行ってほしいということです。

本学は、「自由の学風を持つ」と社会から言われることが多いのですが、そのきっかけの一つは木下廣次初代総長の言葉にあります。

今から遡ること112年前の1897年9月13日、本学初の入学式にあたる入学宣誓式において、木下先生は、「諸君は既に後見を脱したる者として吾人は諸君を遇する也。因て平素の事は細大注入の主義に依らず自得自発を誘導することを務めんと欲す」との教育方針を示されました。京都大学では、学生を独立した一人前の大人として扱い、学生諸君は自主的に責任を持ち、自ら発し、主体的に学習や研究を行ってほしいと希望したのです。やがて、この自由尊重の精神が京都大学の伝統となりました。

言うまでもないことかもしれませんが、皆さんにはくれぐれもこの「自由」を誤解しないようにしてほしいと思います。自由は、勝手気ままで無責任な態度や行動を意味するものではありません。私の理解する自由というのは、自分自身がいろいろな発想をして、自分で自分を大切にして、個人が光ることです。また個人が組織に縛られずに自由な発想で行動しつつも、常に社会や周辺の人々を思いやり、責任ある態度を貫くことです。

京都大学の特色は、そうした諸先輩が数多くいて、それらの諸先輩が学術界・経済界・政界・文化界など多方面で活躍し、独創的で大きな仕事や業績を残されてきたことにほかなりません。京都大学にいるすべての人に個性があって、自己を確立していて、すばらしい人たちの集団にいるという自覚をすること、このことはとても大事なことです。己の中にある自

らに待^たむことができるよう、自らを鍛えるという「自鍛自恃」という基本的な考え方も身につけてほしいと思います。

これから大学での学びが始まりますが、それは高校までのものとは大きく異なり、それに戸惑うこともあるかと思います。これまでの学びには、常に答えがありました。しかし、大学で学ぶ学問には、答えは一つではありません。答えがわからないことが多く、それをどのように解いていくか、その方法論を学ぶことが必要です。そのためには、受け身の姿勢のままでは、京都大学での学問は成り立たないことをまず申し上げなければなりません。皆さんは、いずれ日本社会のみならず世界のリーダーとして様々な分野で活躍していくことになると思います。そのためには、自らが専攻する学問分野の基礎と応用知識や技術を身につけるだけでなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識を貪欲に獲得し、それをもとに多元的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。

チャレンジする対象をどのようにとらえ、定式化し、解いていくかという、真の思考が求められるのです。手がかりとしては、様々な学問分野で編み出されてきた方法論を学ぶことが有効な手段となります。

京都大学における学びの機会、真理探究の道を自ら進む者には、あまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。

決してあきらめず、闊達な対話と相手を尊重し、自らを重んじるよう心がけてください。

教授陣をはじめとする教員は、未知のものを学ぼうとする者に対して、同じ道を歩む先達として真剣に向き合い、必要なそして多様なカリキュラムを用意しています。

これこそが京都大学の伝統的な教育と研究のやり方です。その成果として、1949年、日本で初めてのノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生や朝永振一郎先生をはじめ、昨年物理学賞を受賞された益川敏英先生・小林 誠先生や、一昨年iPS細胞を世界に先駆けて作り出した山中伸弥先生の研究などが結実することになったのです。

これらのよく知られた研究成果以外にも、とても数え切れないほど多数存在する本学の世界最高水準の研究は、既成概念にとらわれない自由活達な議論、そして真摯な学問追究の姿勢から生まれました。本学は10の学部、質の高い17の大学院研究科と専門職大学院、加えて全国で最も数と多様性を誇る13の研究所も擁する日本最大級の総合大学であり、自ら望めば他分野の知識獲得を容易に行いうる環境にあります。

さらに、全学共通教育では1回生を対象としたポケットゼミナール（通称ポケゼミ）と呼ばれるユニークな少人数クラスなどを通じて、これら世界の最先端を走る研究者に直接接する機会にも恵まれています。

最近の社会問題には、グローバルな金融危機に端を発する経済不況、資本主義の在り方、所得格差などが顕著化しています。人権の保護や多様な視点による共同参画社会の実現なども、最重要課題として取り組んでいく必要があります。また、地球環境問題では、生命の起源の探究、安全な医学的応用、新物質や材料の探査、新エネルギー開発、地球環境の機能保全から宇宙開発まで、難問、課題が山積しています。

今、まさに人類にとって地球が有限に見える段階になり、人間自身の生存が問われる時代に皆さんは直面することになります。まさに学際的かつ俯瞰的に物事を考える「生存学」が問われはじめています。

私は、国際会議などで、海外の研究者と長年交流してきましたが、世界的な研究成果をあげている研究者の多くが、自らの研究とは全く異なる分野の学識も豊かで、人間としてとても魅力的なことに驚かされてきました。理系の人でも哲学や法学や文学、歴史といった文系分野にも明るく、文系の人でも、工学や医学や理学、農学といった理系の学問に強い興味を持っています。

皆さんにも、そういう国際的知識人としての教養を身につけると同時に、専門家としての知識のみにとらわれず、一段高い視点から今後の世界を見る能力を得てほしいと思います。そのためにも、皆さんが経験するこれからの大学生活では、読書にも多くの時間を捧げることを総長として希望します。それも多読によって視野を広げ、精読によって深く思索し、自らを磨き、複雑で多元的な問題に対処できるようになってほしいのです。インターネットで安易に情報にアクセスするのではなく、理系文系にとらわれることなく、読書によって頭を耕し、時空を超えてほしいと思います。読書によっていにしへの賢者に相まみえ、世界中の先達を友としてください。そのためには、語学もまた大事であり、この機会にぜひ様々な外国語の習得にも努力してほしいと思います。真の国際人にはどうしても国際語は必要とされます。若いときにチャレンジした外国語は、たとえ忘れることがあっても、再度必要になったときにその語学の勉強を再開する上で非常に役立ちます。

現在、大学には約3,000名の教員、2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は、将来きっと皆さんの人生を彩り深いものにするでしょう。

勉強や研究で出会う人のみならず、クラブ活動やその他の出会いを大切に、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし、革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日も臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆さんには、何よりも自らの健康を大切に、体とところを鍛え、学業に励んでいただきたいと思います。そして、新たな友人と出会い、語らい、課外活動やボランティア活動等様々な可能性に目を向け、力一杯活躍されんことを願いたいと思います。

「初め有らざるなし、克く終わり有る^{すくな}鮮し」という言葉があります。皆さんが入学に際し、それぞれの思いで志を新たにしておられると思いますが、どうかそのフレッシュな意気込みを忘れることなく、ぜひ有終の美を飾ってくださることを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学へのご入学、おめでとうございます。

大学院入学式〔2009年度〕

2009（平成21）年4月7日

満開の桜の中、京都大学大学院に入学される修士課程2,250名、専門職学位課程352名、博士（後期）課程903名の皆さん、おめでとうございます。ご来賓の尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長とともに、今日の佳き日をお祝いしたいと思います。今年は、入学式会場も、これまでの吉田キャンパス内の総合体育館から、ここ平安神宮前の「みやこめッセ」に移して、今回が初めての入学式となります。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

大学院の修士課程では、これまでの学士課程での蓄積の上に、さらに基礎的な知識を補い、研究のために必要な技術を身につけるなど、専門家として独り立ちできるよう体系的な教育が行われます。

専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために理論と実務との橋渡しが重要な課題とされており、新たな教育課程の中で学修を重ね、国際的にも活躍しうる人材として巣立つことが期待されています。

博士（後期）課程では、修士課程までに習得した知識や技量を基礎に、新たに自ら研究計画を構想し、研究を遂行することが中心となります。そして、研究の成果として論文をまとめ、学術誌などによりその成果を国際的に発表していくことになります。

大学院で学ぶということについて、一つアドバイスをしておきたいと思います。大学院では、各自が「自らの研究テーマ」を持ち、それを育てる必要があります。これは、具体的には「問い」の発見ということになります。研究において最も苦しいことは、実はこの部分かもしれません。そして、この「自分の研究テーマ」をどのような観点から、どのように攻略するかを寝ても覚めても考え続けることが、大学院の日々の生活の基本となります。

攻略のためには、必要となる知識を獲得していくことも必要なことなのですが、学問という未知の世界の開拓においては、的をしぼりすぎる学習には限界があるように思えます。それは一見無駄がなく効率的に見えるかもしれませんが、専門の枠を超えるような大きな独創の芽を摘むことになるかもしれないからです。自らの専攻する分野のみならず、理系文系を問わず、他の分野の学識を豊かにすることによって、専門分野における既存の枠組みではとらえられなかった視角が与えられ、独創的な攻略法にたどり着く可能性を忘れないでください。そして、皆さんの後に道ができるような独創的な研究をぜひ実現してください。

私はいつも「学問とは真実をめぐる人間関係である」と思っています。人間は、個体では生きていけない弱い生物です。人類は進化の偶然で生まれました。その人間は社会を作り、共生し、知識を積み上げ、常に新しいことに挑戦することで、地球上を覆うほど繁栄することになりました。それは単純化してみると、人間関係による繁栄と言ってよいのではないかと考えています。

これまでの人生の重要な位置に、私には職業としての学問がありました。学問をやっけて人間関係を勉強したのではなく、人間関係をもとにして学問をさせてもらったと私は思

っています。非常に頭がよくて優秀な人が、なぜか学問がうまくいかないことがあります。それは人間関係がうまくいかなかったのかもしれないと私は推測するわけです。例えば、私たちは資料を調べるにも、データをとるにも、部分的には人を頼ることになります。そうすると、どういう人間関係を築くかによって研究の成果は大きく変わる可能性があります。人間関係がうまくいかないと大事を成し遂げ得ないというのは、人間の本质ではないでしょうか。論文を書く場合でも、人の論文を読み、人と議論し、自分を高め、独創性を発揮するわけです。独創性を発揮するということは、まさしく人間関係そのものと思えるのです。

もちろん学問はそういう側面だけではなく、非常に客観的で、特に自然科学の場合はだれがやっても同じ結果や結論を導き出せるという一種の再現性が重要です。だから、人間関係なんか関係ない、数式を基礎に、厳密な自然観察をして客観的な事実を積み上げていけばよいという考えもあるかもしれませんが、私はそれには与しません。それは一種当然のことですが、その上に積み上がる独創性の大きさこそは人間関係で決まるのだらうと思うのです。

皆さんが、京都大学の学生として、さらなる高みを目指す気概を持ち、積極的に豊かな人間関係を築き、既成概念にとらわれない「問い」を自ら発しながら、新たな学問、課題解決への道程を切り開いていかれることを願っています。本学には、約3,000名の教員と2,500名の職員が在職しています。世界有数の研究を日々推進している本学の教授陣は、皆さんの人間関係のネットワークの中で自学自習を助けてくれることでしょう。

最後になりましたが、ここに入学を迎えた方々の中には、大きな能力や資質を持っていて、まだそれを明確に自覚していない人も多いかもかもしれません。自分の才能を見つけることも学問を志す人にとって大きな発見の一つです。教育は、その人の持っている能力を最大限に引き出すものでなければなりません。京都大学が皆さんの能力を引き出す場であってほしいと願っています。また本学には、大学院を中心にして1,400名におよぶ留学生や多くの海外からの研究者も在籍しています。世界有数の大学との学生交流協定も数多く締結していますので、世界的な視野からの学修も拡げてほしいと思います。

私は、人生を樹に例えることができると思います。大樹が育つには、肥沃な大地が必要です。土壌を富ますことなく、外見のみを整え、栄養を与えるだけでは、大樹は育ちません。大学という大地を肥沃にする努力は役員も教職員も懸命にいたしますが、自らも大きな根を伸ばすことによって、その大地を耕し、さらに肥沃な大地になるよう貢献してほしいと思います。そのためには、専門分野のみに力を注ぐのではなく、あらゆる場面において独創性、適応性、柔軟性を発揮できるよう、人間力も豊かなものとしなければなりません。これからの社会は大きな視野と柔軟な考え方、難問に対する挑戦力を備えたリーダーを必要としています。単に学修・研究領域の専門に留まらず、これまで以上に皆さんが自身を広く、深く耕していただきたいと思います。皆さんが、京都大学の学生として、さらなる高みを目指す気概を持ち、既成概念にとらわれない「問い」を自ら発しながら、新たな学問、課題解決への道程を切り開くと同時に自分自身の価値を高めていかれることを願っています。

京都大学の豊富な学術資源を活用し、さらなる研鑽に努めるとともに、こころも体も鍛え、皆さんが元気に活躍されることを願い、私のお祝いの言葉といたします。

大学院入学、誠におめでとうございます。

博士学位授与式〔2009年度〕

2009（平成21）年5月25日

新緑しげりたる本日、新たに63名の京都大学博士が生まれました。誠にめでたうございます。ご列席の副学長、部局長、教職員とともに課程博士47名、論文博士16名の皆さんに、また、参列されたご家族、ご友人、関係者の皆様に心よりお喜び申し上げます。1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、皆さんで通算36,875名になりました。今回、留学生は9名、女性は16名でした。

皆さんは学位取得という志を胸に大学院の門をくぐり、研究の厳しさや留学生においては言葉や文化の違いを乗り越え、その初志を貫徹されたことにまず敬意を表したいと思えます。目標達成のために重ねられてきた精進と研鑽、そしてその目標を達成するまで頑張りぬくという精神の強靭さは皆さんが今後の人生を生き抜くための大きな力となることでしょう。興味深い新聞記事を目にしました。小学生に将来何になりたいかということを探った第一生命のアンケート結果です。驚くべきことに男子で、学者・研究者はスポーツ選手に続いて第3位を占めているのです。ノーベル賞の波及効果かと思ったのですが、調査時期は去年の7月、そこで過去にさかのぼって調べてみると、ほぼいずれの年も学者・研究者が3位までに入っているのです。女子についても学校の先生は上位を占めます。つまり、小学生までは、学者・研究者や教員はあこがれの職業なのです。人には根源的に知識に対する志向があり、例えば、小学校ではスポーツがあまり得意でなくとも、授業において目立つ子には人気があることと何らかの関連があるようにも思います。しかし、大学院重点化時代の現在においても博士号が授与される数は決して多くありません。経済的な理由、修めるべき知識の膨大さ、未知へのチャレンジの難しさなどが夢の実現を妨げているのでしょうか。それらを皆さんは乗り越えてきたのです。子供時代から大学院修了の今日まで、どこかの時点で人生の目標を学者・研究者として自立することに定め、今日の博士学位の授与をもって一里塚とされた皆さんを誇りに思います。

皆さんに私から一つお願いがあります。人間は限られた時間しか生きることができないので、その時間を濃密に生きてほしいということです。人生80年、生物学的に長く生きられたから幸せとは限りません。いかに濃密に生きたかを問うてほしいのです。濃密に生きるための一番簡単な方法はたくさんの仕事をするということです。そしてそのためには、今日の前にある仕事をテキパキと片付けることが大切です。それが時間のある種の密度をあげることに繋がります。一方、密度という言葉の中には、ある種の豊饒さを求める側面があります。内容を豊かにしようと思えば、皆さんの世界をさらに広げることが有効です。そして、そのさまざまなことをさらに深めていくのです。一つのことを深く考えるということについては、学位取得の過程で、人一倍努力し、十分に経験しているはずですが、これからは今まで以上に広い視野でさまざまな仕事をこなすよう心掛けてください。

その際、世間の常識と反対に、あまりプライオリティということを考えない方がいいかも

しれません。プライオリティを決めるということはそれ自身大変難しいことです。悩めるハムレットは結局何もできないことになりがちです。「巧遅は拙速に如かず」という言葉があります。いくら見事な結果を出そうとも間に合わなければ何にもならないことも多いのです。私はこれまで一つの研究テーマについても、実験をやろうか、理論をやろうか、計算機でシミュレーションをやろうかといつも悩んできました。どれが一番効率的か、などともし考えていたら、ひと月費やしても答えが出なかったに違いありません。私はすべてをやってみました。そして、満足すべき結果を得ることができ、一つのアプローチだけでは得られなかったであろう、対象に対する深い洞察を得ることができたと考えています。その意味で、様々なことに取り組み本当によかったと思っています。プライオリティを決めることは、他のすべてを捨てることにつながることもあります。学位を取るまでは集中して様々なことを捨てないとなかなか真理に近づくことが難しかったかもしれません。しかし、これからはいろんなものを逆に捨てる視点も重要になってくると思います。

皆さんが、これからも学術等を通して世界の平和と人類の福祉に貢献するという基本を忘れることなく、こころを磨き続け、健康に留意され、ますますご活躍されんことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。本日は、誠におめでとうございます。

博士学位授与式〔2009年度〕

2009（平成21）年9月24日

爽秋（そうしゅう）の本日、新たに156名の京都大学博士が生まれました。誠におめでとうございます。ご列席の理事・副学長、部局長、教職員とともに、課程博士128名、論文博士28名のみなさんに、また、参列されたご家族、ご友人、関係者の皆様にお慶び申し上げます。そのうち留学生は53名、女性は43名でした。1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、みなさんで通算37,031名になります。

今日はみなさんの「孜孜忽忽」を大いに讃えたいと思います。あまり耳慣れない言葉かもしれませんが、「孜孜忽忽」とは四文字のたたみかける言葉、四字豊語（じょうご）です。第80代内閣総理大臣羽田孜（はたつとむ）氏の名前の孜（つとむ）は「し」とも読み、「孜孜」と重ねて、学問や仕事などに一生懸命励み努力し休まないさまを、忽然という言葉でも使われる、すみやかなさまを表す「忽」（こつ）を重ねた「忽忽」もすみやかに余事を顧みず着実に励むさまを表します。それぞれの歩みを重ね、休まず、余事にとらわれず着実に研鑽を積まれたみなさんに、まさにふさわしい言葉と思います。目標達成のために重ねられてきた精進と研鑽、そしてその目標を達成するまで頑張りぬくという精神の強靱さは、皆さんが今後の人生を生き抜くための大きな力となることでしょう。京都大学の博士という学位に誇りと気概をもって、これからも研究に励んでいただきたいと思います。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任しましたが、まもなく1年を迎えようとしています。2004年の国立大学法人化以来、京都大学は、激動する社会の構造変化の渦中にあり、大きな変革の時代を迎えています。また、昨年秋以降の米国金融危機に始まる世界的な同時不況、更に、日本では去る8月30日の衆議院選挙結果にみられるように、新しい政治変革への期待の高まりも見られます。世界と日本、今、ともに大きな変化の潮流の中にあり、将来の環境変化や構造変化に備えた新しい対応が求められていると思います。

京都大学においても来年、2010年からは、向こう6ヶ年の第二期中期計画期間に入ります。現在、新たな中期計画に向けた準備作業を進めていますが、優秀な博士学位取得者に対する支援策の一環として、次世代の指導的研究者の育成と若手教員ポストの拡充を行う京都大学「白眉プロジェクト」を始動させます。「白眉プロジェクト」は、博士の学位を有する研究者を次世代を担う先見的な研究者に育成することを目的に、各部局の様々な取り組みに加え、優秀な若手研究者を京都大学の准教授、助教として採用し、京都大学白眉研究者の称号を与え、自由な研究環境の中で独創的・先駆的な研究を支援する京都大学独自の新しい任用の仕組みです。この秋、まもなく公募を開始し、2010年早期の採用を目指しています。初年度は、20名程度の採用を予定しており、本日ご出席のみなさんの中からたくさんの白眉研究者が生まれることを大いに期待しています。

また、より一層の人材活用を図る観点から、去る3月、「京都大学男女共同参画アクションプラン」を策定しました。本アクション・プランは、「多様性こそが今後の教育・研究の活力の源泉であるとの信念の下、男女共同参画を推進し、女性教職員や女子学生を含めた多様な人材がいきいきと活躍できる環境を構築する」ことを目指し、2009年度から向こう5ヶ年、女性が存分に能力を発揮できる大学となるよう実施するものです。近年、本学の女性教員、大学院博士課程に在籍する女子学生は徐々に増えていますが、さらに女性研究者数を増やすためには、高い志を持った優れた女性研究者にたくさん応募していただく必要があります。本日ここにご出席のみなさんの積極的な応募をお願いします。ここに紹介した新規のプロジェクトなどを通じて、京都大学が魅力・活力・実力ある世界最高水準の大学であり続けられるよう、総長として努力を続けていきたいと思っております。

史記に、「狐疑猶予すれば、後に必ず憂いあり。断じて行えば鬼神もこれを避く。」という言葉があります。努力の後の成功は、この学位取得の今実感されるころと思っておりますが、それをひとつの励みとして、今後も迷うことなく決断し、自分を信じて未来を切り拓いていただきたいと思います。

最後になりましたが、学位を得られるまでの研鑽の道程において、支援を惜しまれなかったご家族、友人の皆様には、心からの感謝を申しあげたいと思っております。

本日、博士の学位を得られたみなさんの中には、これから学問の世界でさらに研究を進める方、また社会人として、新たな職場で活躍される方などがおられると思いますが、地球社会の調和ある共存に貢献するという基本を忘れることなく、こころを磨き続け、健康に留意され、ますますご活躍されんことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

博士学位授与式〔2009年度〕

2010（平成22）年1月25日

京都大学に新たに94名の博士が生まれました。誠におめでとうございます。

ご列席いただきました理事・副学長、部局長、教職員とともに、課程博士66名、論文博士28名の皆さんに、また、ご参列のご家族、ご友人、関係者の皆様にもお慶び申し上げます。1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、皆さんで通算37,125号となりました。今回、海外からの留学生は11名、女性は21名でした。

皆さんが学位取得という志を胸に大学院の門をくぐり、研究の厳しさや留学生においては言葉や文化の違いを乗り越え、その初志を貫徹されましたことにまず敬意を表したいと思います。目標達成のために重ねられてきた精進と研鑽、そしてその目標を達成するまで頑張りぬくという精神の強靱さは、皆さんが今後の人生を生き抜くための大きな力となることでしょう。皆さんが、京都大学の博士として、凜とした気概をもち、既成概念にとらわれない「問い」を自ら発しながら、課題解決への道を切り拓いていかれますように願っています。

本日、博士学位を授与された皆さんに私から「自樹自立」という言葉を贈りたいと思います。自立の部分は皆さんご存知かと思いますが、自らと樹木の樹をあわせた自樹は私の造語です。樹木の樹にはうえるという意味があります。自らうえ、自ら立つ。いま皆さんはまっすぐに天を目指して伸びる若木です。それぞれの大学院において専門分野を定め、非常に深く掘り下げて、オリジナリティのある仕事を成し遂げたことが今日に結実しました。皆さんが拓いたフロンティアをさらに開拓していくことは引き続き必要ですが、同時に皆さんはその視界をますます広げていかねばなりません。すなわち、今後専門家として、ひとり立ちしていく上では、深い教養や広範な周辺分野への理解や学際的な領域への目配り、あるいは関心の持ち方が重要になってきます。これから社会のリーダーとして生きる皆さんが狭い専門分野に安住し、人生を終えられる可能性はまずありません。そうすると、研究の幅を広げる能力や、的確な自己表現にとどまらず、人と話をして自分の考えに人の気持ちを向けさせるといった高次のコミュニケーション能力も必要となってきます。自分の専門をベースにして、地球社会の将来、コミュニティの将来、あるいは学問の将来を自ら考えることも必要でしょう。そして、皆さんが真の大樹に育つためには、衍沃な大地と光を求め、必要とあらば樹（うえ）かえをし、しっかりと根を伸ばす必要があります。深く広く根を張る力がある人はさらに高く伸びることができます。

本年4月より、優秀な博士学位取得者に対する支援策の一環として、世界における次世代の指導的研究者の育成を目指す京都大学「白眉プロジェクト」が始動します。「白眉プロジェクト」は、次世代を担う世界トップレベルの研究者を育成することを目的とし、本学の各部局の様々な取り組みに加え、優秀な若手研究者を京都大学の特定教員（准教授、助教）

として採用し、自由な研究環境の中で独創的・先駆的な研究が活発に行われるよう支援する京都大学独自の新しい任用・育成の仕組みです。昨年秋に初の公募を開始し、来年度の20名の採用枠に588名の応募がありました。そのうち20%が外国人、20%が女性、61%が学外からの応募でした。本学では、今後とも「白眉」と呼びうる優秀な人材の発掘に力を注いでいきたいと思っております。本日までご出席の皆さんの積極的な応募にも大いに期待しております。

最後になりましたが、学位を得られるまでの研鑽の道程において、支援を惜しまれなかったご家族、ご友人、関係者の皆様には、心からの感謝を申しあげたいと思っております。

本日、博士の学位を授与された皆さんの中には、これから学問の世界でさらに研究を進める方、また社会人として、新たな職場で活躍される方などがおられると思いますが、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存と、ますます混迷を深める世界の中で人類の生存維持を図るための総合的、俯瞰的学問である生存学に貢献するという基本を忘れることなく、こころを磨き続け、健康に留意され、ますますご活躍されんことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、誠にありがとうございます。

大学院学位授与式〔2009年度〕

2010（平成22）年3月23日

本日、京都大学において修士の学位を授与される2,131名の皆さん、修士（専門職）の学位を授与される151名の皆さん、法務博士（専門職）の学位を授与される187名の皆さん、博士の学位を授与される557名の皆さん、誠におめでとうございます。ご来賓の沢田元総長、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心からお祝い申し上げます。

今年は、修士並びに博士の学位授与式を合同し、初めての大学院学位授与式として、ここ「みやこめっせ」で挙行することになりました。これにより、多くのご家族、ご友人、関係者の皆様と学位授与の喜びをともにできますことを大変うれしく思います。

本日で、京都大学が授与した修士号の累計は、61,280、修士号（専門職）の累計は478、法務博士号（専門職）の累計は893、博士号の累計は、37,682になりました。

博士（薬科学）の学位については、今回が初めての授与となります。

また、本日学位を授与される皆さんには、651名の女性と248名の留学生が含まれています。

これまで皆さんの在籍してきた大学院は厳しい研鑽の場であったかと思えます。しかし、気が付いていない方も多いかもかもしれませんが、実は皆さんは研究室を中心に、緩なす人間関係の中で温かくはぐくまれてきたのです。そして、ともに未来の可能性に挑戦する多くの先輩・後輩や友人に囲まれ、成果を上げてきたのではないのでしょうか。もちろんまわりの力というより、自らの力のみで優れた成果を上げてきたといえる人もいるのかもしれませんが。しかし、研究室という環境の光を受けて、たとえていえば、月の光のように輝いてきた人も多いのではないのでしょうか。いくら美しくても月は自ら輝くことはできません。確かに直ちに太陽のような恒星のように自ら輝くというのは無理かもしれませんが、大学院において専門を修め、専門分野において自力で灯を点らせる力を学位の授与という形で京都大学において認められた皆さんです。臆することなく、自ら輝き、その光で社会全体を良きものに変える力になっていただきたいと思えます。これが皆さんに課された使命です。

学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、この晴れの学位授与式へ大きな期待を胸にご臨席いただいているものと思えます。本日学位を授かる皆さんはこの式典が終わったら、これまで受けた様々なご支援に対して、感謝の気持ちを率直に伝えてください。私たち教職員一同も、ここに至るまでの様々なご苦勞やご支援に対してお礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと思えます。

修士の学位を授与される皆さんの中には、独創性あふれる修士論文を完成させた人も、それぞれの専門分野の^{うんおう}蘊奥を垣間見た人もおられるでしょう。それを人生の基礎として、それぞれの進路においてますます研鑽を積んでいただきたいと思えます。とりわけ、博士課程に進学する人は、それぞれの専門分野への更なる沈潜が求められます。修士課程を修了し、多くは今後どの方向に自分の才能を伸ばせばよいかを見極めることができているものと思

ます。しかしながら、まだそのことを定め得ず悩んでいる人もいるかもしれませんし、課程を修了したものの、違う方面に才能があるかもしれないと思っている人もいるかもしれません。詩仙・李白は「天の我が材を生ずるは、必ず用あり」とうたっています。皆さんの才能が開かれる道は必ずあります。これからも絶えずそれを探りながら、自分の道を切り拓いてほしいと思います。

博士の学位を授与される皆さんには、それぞれの専門を掘り下げ、他人が成し得なかった独創的な仕事を成し遂げたという誇りと自信がこれからの人生の大きな支えとなります。切り拓いた研究テーマそのものは、時の流れの中で陳腐化していく運命にあるものもあるかもしれません。しかし、それを作り上げる過程で傾けた努力や体験した悩みや成し遂げたときの喜びは、皆さんの人格を磨いてきたはずです。私はジョン・F・ケネディーも好んだ上杉鷹山の「為せば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり」という言葉が好きです。似たような言葉は新約聖書のマタイ伝にもみられます。有名な「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。たたけ扉を、さらば開かれん」がそうです。すなわち、何事も気迫と自信をもって取り組めば必ず事は成る、成らないのはやりきるという強い信念がないからである、という考えでしょう。これからの人生で直面する苦しいときや追いかけるべき課題を見失ったときには、博士論文の完成に費やした日々を思いだして、チャレンジする強い意志と信念を呼び戻していただきたいと思います。

皆さんのこれから進む人生において、一層の知識や経験が必要となる時がやってくるかも知れません。その際には、皆さんが学んだこの京都大学を思い出してください。そして気軽に大学を訪れてください。京都大学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。この大学で出会った多くの友人や先輩・後輩や教職員が皆さんの人生の基軸として力になります。

中国の十八史略に「士は別れて三日なれば、即ちまさに刮目して相待つべし」という言葉があります。努力を重ねる者は日々成長するので、次に会うときには、きっと飛躍的な成長を遂げているから、刮目すなわち目をこすって注意深く見なければならぬという意味です。皆さんと次にお会いするときには、必ずや更に成長した皆さんの姿を刮目して見ることになるかと信じています。

現在、大学は社会からの厳しい評価の目にさらされています。チャールズ・ダーウィンの進化論では、生き残るのは強いものでも賢いものでもない、適応できるものであるとっています。私たち京都大学も努力を重ね「強い大学」や「賢明な大学」だけでなく、「変化の空気を読み取り、変化に適応できる大学」をめざしたいと思っています。皆さんも母校を温かく見守り、今後ともご支援いただきますようお願いいたします。同時に、京都大学は皆さんの人生の基軸となっていきたいと考えています。

本日学位を授かりし3,026名の皆さんが、持てる力のすべてを活かしきる場所を見つけ、これまでの研鑽の過程で培われてきた豊かな人間力に更なる自己研鑽を重ね、世界のリーダーたるべく更に高度な教養を深め、いきいきと活躍することを願い、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

卒業式〔2009年度〕

2010（平成22）年3月24日

本日、学士の学位を授与される2,752名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の沢田元総長、井村元総長、名誉教授、列席の副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんのご卒業を心からお祝いいたします。あわせてご家族、ご友人、関係者の皆様にもお慶び申し上げます。

京都大学の113年の軌跡において、皆さんを含めて本学の卒業生の累計は、185,365名となりました。皆さんの前には18万人を超える先輩が存在することになります。

皆さんは今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、人類全体の生存基盤がおびやかされつつあるこの困難な時代に、世界を舞台に未来を切り拓く使命を果たさねばなりません。その使命を果たすためには、これまで習得した知識だけでは十分でないことは、皆さんも重々承知されていることと思います。知識はネットワーク化され、一つの体系をなさないで臨機応変に使えるものとはいえません。また、ネットワークをなすのは個別の知識にとどまらず、その周辺にある人間関係も自然にその構成要素となります。人間関係のネットワークは融通無碍なものです。同世代のネットワークに加えて、先輩・後輩・友人や教師とのネットワーク、さらに書物などを通じ時間軸や国境を越えたネットワーク、例えば、過去の巨星もあなたのネットワークの一員になっているかもしれません。「学問とは真実を巡る人間関係である」と私が信ずる所以であります。大学生活を通じて築かれた、時空を超えた知識のネットワークが皆さんの重器です。今後はますますネットワークを広げ、世界が直面する多元的な課題の解決に挑戦していただきたいと思っております。

かつて本学の教授を務めた哲学者・和辻哲郎先生は「成長を欲するものは、まず根を確かにおろさなくてはならない。上に伸びる事をのみを欲するな。まず下に食い入ることを努めよ」という言葉を残されています。ネットワークはこの根に通じます。根を伸ばし、根を大きく張り、様々の良きものを自らの栄養として食欲に吸い上げ、常に120%の目標を持ち続け、自らを大樹となしてほしいと思っております。

皆さんはこれから社会において多くの試練に直面することになると思いますが、苦難の時にこそ、大学を思い出してください。大学というものは、学生の自学自習を鼓舞し、広い視野と深い教養を身につけるにふさわしい肥沃な土壌です。学生にとって大学は、それぞれが社会で自立できるよう自らを鍛え、強い気迫と意志、人の気持ちがわかる情の豊かさ、深く広い知識、即ち、知、情、意の充実をはかり、体力を強化し、人間力を磨き上げる場所ではないかと私は考えています。皆さんは大学を卒業して初めて、いかに才能にあふれ、素晴らしい人々に囲まれていたかがわかることでしょう。社会人として旅立つにせよ、進学するにせよ、この卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんがときには母校を訪ね、語らい、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として、積極的に活用していただけるよう願っています。

これからも世界は大きく変貌していくことでしょう。その激動の原動力と対応力はすべて人にかかっています。このことを受け、世界の先進国は人づくりの最終段階ともいべき高等教育に力を入れて、更なる発展の道を高等教育が生み出す技術革新にかけようとしています。一方、我が国の高等教育に対する財政支出の水準はOECD加盟国中最下位であり、最近5年間の高等教育費の伸びはOECD加盟国で唯一マイナスになっています。その結果、不況にあえぐ家計が高等教育を支えつづけなければならないという現実があります。ご家族の厚い支援に大学としてお礼申し上げるとともに、卒業生の皆さんには、これまでのご家族の負担や支援に対し、今日の良き日にぜひ感謝の気持ちを伝えてください。

本日、皆さんの卒業の記念に風呂敷を用意しました。風呂敷は「包む」、「結ぶ」、「広げる」といった使い方から、「幸せを包む」、「人を結ぶ」、「つきあいや見識を広げる」という意味に通じるといわれています。京都大学を卒業される皆さんが、人との結びつきを大切にし、更に見識を広げ、それぞれの幸せに包みこまれますように願って、本記念品を贈ります。

最後になりましたが、卒業して、社会で活躍される皆さんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍しつつ、皆さんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もお願いします。また、約6割を占める皆さんは、修士課程に進学され、大学院で学び、研究を続けることとなりますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、体とこころのバランスを大切に、ご活躍されることを願い、学士の学位を授与された皆さんへの私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業おめでとうございます。

学部入学式〔2010年度〕

2010（平成22）年4月7日

本日、桜舞うこの「みやこめっせ」にご参集いただきました3,013名の皆さん、京都大学にご入学おめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、西島安則元総長、尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長とともに、今日のよき日をお祝いしたいと思います。皆さんはこれまで長く厳しい受験の道を辿ってこられたと思います。これまでの精励に敬意を表します。また、皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

さて、本学に入学された皆さんに、まずお話ししたいことがあります。それは、本学の自由についてです。本学の基本理念は次のような前文で始まります。ぜひ一度本学の基本理念を読んでいただきたいと思います。

「京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。」としています。

この前文の根底を流れるのは、「自主自立」の精神であり、それは、本学の学生諸君には、一人の成人として、自らに責任を持ち、自ら主体的に勉学に励んでほしいということの意味しています。いうまでもないことかもしれませんが、くれぐれもこの「自由」を履き違えないでください。自由は、勝手気ままで無責任な態度や行動を意味するいわゆる「気まま、気随」ではありません。私の理解する本学の自由というのは、己の内外にある既成概念にとらわれることなく、発想を巡らし、己を大切に、個人が自ら光るという概念です。また、個人が既成概念や既存のシステムに縛られることなく、自由な発想に基づいて行動しつつも、常に社会や周辺の人々を思いやり、責任ある態度を貫く。さらに、自由な選択を一度したのちには、選択したものに自ら責任を持ち、やり遂げるまで頑張りぬく。これをすべて備えた自由こそ本学の自由ではないでしょうか。自由の学風は、そうした責任ある自由を身につけた諸先輩を輩出し、それらの諸先輩が各界で活躍し、独創的な業績や仕事を成し遂げることによって形作られてきたものです。

これまで、受験生としての皆さんの生活は確かに厳しいものであったと思いますが、それでも安全なルールの上を走ってきた側面があることもご承知のことでしょう。しかし、それだけでは本学の自由を謳歌することはできません。大学生活では今までの自分をもう一度見つめなおし、必要とあらば、これまでの学びのスタイルを組直す、いわゆるアンラーニングが必要だと思います。

これから、大学での学びが始まりますが、それは、高校までのものとは大きく異なり、戸惑われるかもしれません。これまでの学びは、いわば先人の教えをしっかりと学び取ることだったといえるでしょう。従って常に答えがありました。この段階は「聞慧（もんえ）」即ち聞き取ることによって「知識」を得ようという段階です。しかし、大学で学ぶ学問においては、その段階を越えなければなりません。即ち「聞慧」によって得られた知識の基礎の上

に、「思慧（しえ）」「修慧（しゅうえ）」を通して思索と行動を続け、自分自身の思惟を展開しなければなりません。答えは一つとは限りません。答えは存在しないかもしれません。課題の多くは、少なくとも現在未知であり、それをどのようにとらえ、解いていくかも自明ではありません。しかし、文明の黎明期から積み重ねられてきた、この諸学芸の方法論「聞思修」の智慧の段階的教育法は、1,200年も前の伝教大師、最澄も叡山の教育に取り入れていました。この方法論は、皆さんにとって大いなる力となります。今の皆さんには、その力を一日も早く我が物とすることが必要です。また、受け身の姿勢のままでは、真の学問を身につけることはできません。皆さんは、いずれ日本のみならず、世界のリーダーとして、様々な分野で活躍していくことになると思います。そのためには、自らが専攻する学問分野の基礎と応用にかかる知識や技術を身につけるだけではなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識を教養として貪欲に吸収し、それをもとに多元的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。

これと関連して、青春の真ただ中におられる皆さんに言っておきたいことがあります。青春の時期は人生において最も尊く、最も価値のある時期の一つでしょう。しかし、同時に最も危ない時期の一つでもあります。かつて本学の教授を務められた哲学者・和辻哲郎先生が二十歳代の末期に書かれた随想をまとめられた「偶像再興」という名著があります。その中に「すべての芽を培え」という作品があります。その珠玉の小品において、先生は青春のみずみずしさ、しなやかさという精神の特性に加えて、肉体の絶頂期に伴い、頭がぐらぐらし、心が沸き立つような直接的な人間の欲望に制圧される危うさの同時性を指摘しておられます。青春時代のこれらの勢いを萌えいでたばかりのいろいろな樹の芽に例えておられます。これらの芽の成長が、日常的にかつ内在的に存在する刺激の追及のみによって、歪んでしまわないようにして、その芽の成長を助ける滋養分だけを与えることが肝要と言っておられます。この滋養分こそが人類が築いてきた芸術、哲学、宗教、歴史であり、これらの精神的な宝によって偏らない教養が得られる、と説かれています。つまり、青春時代に学問を志すと同時に違った次元で青春時代を象徴するすべての芽を培え、と諭しておられます。全く同感です。中高年になって光り輝く教養も京都大学で身につけてください。

京都大学における学びの機会、真理探究の道を自ら進む者にあまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。決してあきらめず、「活達な対話」と相手の立場、考え方も尊重することを忘れず、あわせて自らも重んじるよう、即ち自重自敬をこころがけてください。本学の教員は、未知のものを学ぼうとする者に対して、同じ道を歩む先達として真剣に向き合います。また、大学として必要かつ多彩なカリキュラムを準備しています。決して安易な勉学の道はとらないでほしいと願います。ここでフランスの詩人ジャン・コクトーが言った「青年は決して安全な株を買ってはならない」という言葉を皆さんに贈っておきたいと思います。

皆さんは、国際的知識人としての教養を身につけると同時に、専門家としての知識だけではなく、複眼的に今後の世界を見る能力を得てほしいと思います。そのためにも、皆さんが経験するこれからの大学生活では、読書にも多くの時間を費やすことを希望します。それも

多読によって、視野を広げ、精読によって深く思索し、自らを磨き、複雑で多元的な問題に対処できるようになってほしいのです。インターネットで安易に情報にアクセスするだけでなく、文理を越える読書によって頭を耕し、時空を越えてほしいと思います。読書によって、いにしえの賢者に相まみえ、世界中の先達を友としてください。そのためには、語学もまた大事であり、この機会に是非さまざまな外国語の習得にも努力してほしいと思います。真の国際人には、どうしても国際語は必要とされます。若いときにチャレンジした外国語は、たとえ忘れることがあっても、再度必要なときにその語学の勉強を再開する上で非常に役立ちます。

現在、本学には、およそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は、将来きっと皆さんの人生を彩り深いものにするでしょう。学習や研究で出会う人のみならず、クラブ活動やその他の出会いを大切に、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日もご臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

皆さんは難関を突破し、今日ここに集まっています。皆さんの多くは、今後どの方向に自分の才能を伸ばしていけばよいのかを決めていることと思います。しかしながら、まだそのことを定め得ず悩んでいる人もいるかもしれませんし、入学したものの、違う方面に才能があるかもしれないと思っている人もいるかもしれません。学力の発揮だけが才能ではありません。比喩的にいえば、平面角の 2π ではなく、立体角の 4π のどこかに皆さんが大きな樹に成長するような方向がきっと存在します。それも、華麗な花をつける樹木だけでなく、むしろ逆境においても常に変わらずみずみずしい緑を保つ「歳寒の松柏」となれるよう、あわてることなく京都大学の在学中にその方向を見つけていただきたいと思います。

最後になりましたが、皆さんには、何よりも自らの健康を大切に、体とこころを鍛え、学業に励んでいただきたいと思います。そして、新たな友人と出会い、語らい、課外活動やボランティア活動等様々な可能性に目を向け、力一杯活躍されんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学へのご入学、おめでとうございます。

大学院入学式〔2010年度〕

2010（平成22）年4月7日

本日、京都大学大学院に入学される、修士課程2,247名、専門職学位課程321名、博士後期課程939名の皆さん、おめでとうございます。ご来賓の名誉教授、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長とともに、今日の日をお祝いしたいと思います。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

修士課程では、これまでの学士課程での蓄積の上に、さらに基礎的な知識を補い、研究のために必要な技術を身につけるなど、専門家として独り立ちできるよう体系的な教育が行われます。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う新たな教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍する人材を養成します。

博士後期課程では、修士課程までに習得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信していくよう指導が行われます。これら大学院において、皆さんは専門分野において世界の最先端に躍り出ることを目指してください。

皆さんの進む大学院での学問について、一つアドバイスがあります。これまでの人生において、私には職業としての学問があり、それを楽しんで参りました。そのなかで「学問とは真実をめぐる人間関係である」と感じるようになってきています。学問により人間関係を勉強したのではなく、人間関係をもとに学問をさせてもらった。私はそう感じています。非常に頭がよくて優秀な人が、なぜか学問がうまくいかないことがあります。そのときその人は、人間関係がうまくいかなかったのかもしれないと推測しています。例えば、私たちは資料を調べる際にも、データを収集する際にも、部分的には人に頼ることになります。そうすると、これまでどういう人間関係を築いてきたかによって、研究内容は大きく変わる可能性が出てきます。人間関係がうまくいかないと大事を成し遂げ得ないというのは、人という社会性を持つ存在にとって本質的なことなのではないでしょうか。論文を書く場合でも、人の論文を読み、人と議論し、それを通して自分を高め、独創性を発揮するわけです。独創性を発揮するということは、まさしく人間関係そのものと私の目には映るのです。

もちろん学問はそういう側面だけではなくて、非常に客観的で、特に自然科学の場合は、だれがやっても同じ結果や結論を導き出せるという一種の再現性が重要です。だから、人間関係なんか関係ない、数式を基礎に、厳密な自然観察をして、客観的な事実を積み上げていけばいいという考えもあるかもしれません。しかし、私はそういう考えには与しません。客観性を問うことは当然のことですが、その上で開花する独創性の素晴らしさこそは、人間関係に規定されることが多いと思うのです。私はその例として日本人離れて偉大な思想家、宗教家であった空海を思わずにはおられません。彼が世に出たのは、ちょうど現在の大学院生の年頃だったと思います。

大学院では、各自が「自らの研究テーマ」を持ち、それを大きく育てていく必要があります。

す。「記問の学」、つまり、すでに確立された学問体系や現在多くの学者が取り組んでいる、いわば流行の学問領域だけにとらわれず、まず「問い」の発見を自らが始めなければなりません。研究において最も苦しいことは、実はこの部分かもしれません。そして、この「自らの研究テーマ」をどのような観点から、どのように攻略するかを日夜考え続けることが、日々の大学院生活となります。攻略のためには、知識を充実させていくことも必須なのですが、学問という未知の世界の開拓においては、あまり的をしぼりすぎる学修には限界があるように思えます。必要と思われることだけにしぼって学修することは、一見無駄がなく効率的に見えるかもしれませんが、専門の枠を越えるような大きな独創の芽を摘むことになるかもしれません。自らの専攻分野を越え、理系文系を問わず、他の分野の学識を豊かにすること、即ち大学院生にふさわしい高度な教養を身につけることによって、専門分野における既存の枠組みではとらえきれなかった斬新な視角が与えられ、独創的な攻略法にたどり着くことができるかもしれないからです。

大学院生にふさわしい高度な教養を考えてみると次の内容を持つと思われます。一つは、今直ちにというわけではなく、あなた方が世界の中心的役割を担い始める10年先の地球社会の行く末を見つめ、その時代に社会のリーダーとして必要とされる知識体系や考え方を準備しておくことです。もう一つには、リーダーとして世界で活躍する際に必要となる語学力、リテラシー、説得力、企画力、発信力、感化力などの人間力を涵養し、弾力性のある豊かな人間力を身につけるということです。この二つが重要だと考えます。特に博士後期課程では、このことが今後ますます必要とされることだと思えます。

私はしばしば人生を樹に例えます。大樹が育つには、肥沃な土壌が必要です。土壌を富ますことなく、外見のみを整え、水を与えるだけでは、大樹は育ちません。大学という土壌を肥沃にする努力を我々教職員も懸命に重ねますが、自らも広く深く根を伸ばし、根を張って、先人の積み上げてきた多彩な学術の華の蜜を貪欲に吸収して、大樹となってほしいと思えます。

皆さんの多くは、今後どの方向に自分の才能を伸ばしていけばよいのかをすでに決めていることと思います。しかしながら、まだそのことを定め得ず悩んでいる人もいるかもしれませんし、課程に入学したものの、違う方面に才能があるかもしれないと思っている人もいるかもしれません。19世紀のアメリカの思想家ラルフ・ワルド・エマーソンは次のように言っています。「才能とは天から与えられた使命だ。自分に対していっさいの空間が開かれるような方向がひとつはあるものだ。その方向に限りない努力を傾けよと無言のうちに誘いかける能力が、人間にはいろいろそなわっているものだ」。彼の言うように、皆さんの才能が花開く道は必ずあります。これからも絶えずそれを探りながら、自分の道を切り拓いていってください。

また、本学には大学院を中心にして1,400名におよぶ留学生や海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学生交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の様々な機会を提供しています。また、多くの京都大学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に拡げて、ぜひ積極的に海外に

雄飛してほしいと思います。若いときの海外経験は、何物にも代え難い有意義なものです。

閉塞感に包まれている地球社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概をもったリーダーを必要としています。その未来は、皆さんを含めて我々自らの手で拓かねばなりません。皆さんが、京都大学の大学院生として、さらなる高みを目指し、既成概念にとらわれなくて、常に「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくと同時に、自らを心身ともに磨いていかれることを願い、私のお祝いのことばといたします。

皆さんのご活躍を期待しています。大学院入学、誠におめでとうございます。

博士学位授与式〔2010年度〕

2010（平成22）年9月24日

清秋の本日、新たに誕生した164名の京都大学博士の皆さんに学位を授けることができますことを大変うれしく思います。そして、列席の副学長、部局長、教職員とともに課程博士140名、論文博士24名の皆さんに、また、参列されたご家族、ご友人、関係者の皆様に心よりおよろこび申しあげます。1897年の創立以来、京都大学が授与した博士の学位は、皆さんで通算37,846名になりました。今回の学位授与者のうちで、留学生は33名、女性は38名です。

皆さんが研究の厳しさや悩みを乗り越え、さらに留学生においては言葉や文化の違いを乗り越え、博士学位取得という初志を貫徹されましたことにまず敬意を表したいと思います。目標達成のために重ねられてきた精進と研鑽、そしてその目標を達成するまで頑張りぬくという精神の強靱さは皆さんが今後の人生を生き抜くための大きな力となることでしょう。皆さんが京都大学の博士として、凜とした気概を持ち、既成概念にとらわれない「問い」を自ら発しながら、課題解決の道を切り拓いていかれますように願っています。

さて、ここで皆さんの陥りがちな、ある危険についてお話してみたいと思います。皆さん、風船はよくご存じでしょう。その風船を膨らます前に、マジックでどこかに「私」と書いてその周りに点をたくさん書きます。そして、その風船を徐々に膨らませてみましょう。すると、はじめのうちは、「私」はたくさん点に取り囲まれていたのですが、風船が膨らむにつれてそれらは互いに離れていきます。ここで、この「私」という点に少し感情移入してみると、私だけがここで頑張れた、他の人たちは違う道に行ってしまったと思うこともできます。もう少し強く感情移入すると、続けているのは私だけ、私こそ世界のトップといった具合にも感じられるのではないのでしょうか。この状態は、客観的には「私」以外のすべての点についてもいえることにすぎません。しかし、本来は人間や自然を理解するために研究者それぞれが独自のアプローチで研究を進めてきたにすぎないのに、自分の専門の細かいところに集中し、どんどん狭く深く掘り下げ、気がついたら自分こそがその分野で世界のトップに立っていると感じられるようになっていきます。この自己満足がますます深堀をすすめることになります。これが木を見て森を見ずといった調子で進められるとしたら恐ろしいメカニズムです。世間から「専門バカ」と揶揄されるのはそういう状態をさしているわけです。ただし、「専門バカ」はすなわち超専門家でもあります。何事につけ一意専心するというのは大変苦痛を伴うことです。それゆえそれをやり遂げたという立派さがありますが同時に、視野が狭くなっていないかどうかを常に確かめる必要があるものなのです。膨らんだ風船は、自分ひとりが専門家として生き残った状態と主観的に考えることもできますし、皆が多様性を持って、お互いに違う分野で広がって、新しい学問の余地が出たと客観的に認識することも可能な状態です。皆さんには自己の研究を常に客観的に見るという態度を貫いてほしいと思います。

ここで皆さんにアドバイスがあります。博士学位の取得という形で一つの収穫を終わった皆さんは、いま新しい種を蒔く時期に来ています。皆さんの進めてきた研究にはこれからもまだまだ大きな収穫があるのかもしれませんが、その収穫をさらに実りあるものとするためにも、意識して新しい種を蒔いてください。新しい種を蒔かない限り、10年もすれば研究は枯れてしまいます。研究テーマはそれが最先端であればある程、陳腐化していく速度も速いのです。専門の新たな可能性を探り、その魅力を広く発信していくことで専門分野を活性化させ、さらに専門外の方法論など異質なものと格闘し、それを通じて自己の知を組み替えていく、これが新しい種を蒔くということです。先ほどの風船の例でいいますと、「私」の面白さをまわりに伝え、まわりに新たに多くの点を集めるとともに、「私」自身が小さく凝固していくのではなく、新しいテーマを開拓し、風船に新しい点を刻み、つまり、新しい種を蒔き、さらにまわりを巻き込んで、大きな「私」となっていく。このようなダイナミックなプロセスをこれからの長い研究生生活で実践してほしいと思います。

最後になりましたが、学位を得られるまでの長い研鑽の日々において、支援を惜しまれなかったご家族、ご友人、関係者の皆様には、心からの感謝を申しあげたいと思います。

本日、博士の学位を授与された皆さんの中には、これから学問の世界でさらに研究を進める方、また社会人として新たな職場で活躍される方などがおられると思いますが、多元的な課題の解決に果敢に挑戦し、地球社会の調和ある共存とますます混迷を深める世界の中で人類の生存に貢献するという本学の基本的姿勢を忘れることなく、こころを磨き続け、健康に留意され、ますますご活躍されんことを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

大学院学位授与式〔2010年度〕

2011（平成23）年3月23日

さる3月11日に東北地方太平洋沖地震が発生しました。この空前絶後の巨大地震と大津波でかけがえのない命が数多く失われました。大変痛ましいことであり、その中に本学の4回生3名も含まれ、関係者一同深く心を痛めており、ご遺族の方々には心からの哀悼の意を表します。そして、この惨劇ともいふべき東日本大震災とそれに続く福島原子力発電所事故により被害にあわれている方々や被災地にご家族、ご親戚、ご友人・知人がおられる方々に心からお見舞い申し上げます。今後、京都大学として、できる限りの支援の手を差し伸べる決意です。

さて、京都大学において修士の学位を授与される2,164名のみなさん、修士（専門職）の学位を授与される142名のみなさん、法務博士（専門職）の学位を授与される201名のみなさん、博士の学位を授与される612名のみなさん、おめでとうございます。本日学位を授与される3,119名のみなさんには、708名の女性と262名の留学生が含まれています。本日で、京都大学が授与した修士号の累計は63,468名、修士号（専門職）の累計は622名、法務博士号（専門職）の累計は1,095名、博士号の累計は38,458名になりました。列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長をはじめとする教職員一同とともに、みなさんの学位取得をお祝い申し上げます。

学位を授与されるみなさんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、この学位授与式へ大いなる期待を胸にご臨席いただいているものと思います。本日学位を授かるみなさんは、周りの方々からこれまで受けた長年にわたる支援に対して感謝の気持ちを抱いていることと思いますが、この式典の後、その感謝の気持ちを率直に伝えてください。私たち教職員一同も、ここに至るまでのご家族の様々なご苦勞やご支援に対して御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと思います。

これまでみなさんが在籍してきた大学院は厳しい研鑽の場であったかと思います。みなさんの中には、何度も挫折しそうになり、苦悩の日々を経験された人もいるでしょう。みなさんはそれらを乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を本日、京都大学学位の授与という形で認められました。みなさんには本日から誰にも臆することなく、それぞれの学位を誇りとし、個性を發揮し、身につけた専門を生かして、未曾有の国難に見舞われた日本を蘇らせ、復興させる大きな原動力になってほしいと願っています。これがみなさんに課された使命です。また、長期的には人類が直面する多岐にわたる多難な問題、課題に果敢に挑戦し、それらの問題の解決に大きな貢献をされることを期待します。学問とは真実をめぐる人間関係であると私は信じています。みなさんには、人の苦しみ、痛みを敏感に感じ取り、相手の立場、人類社会の状況をよく理解し、天に恥じず、堂々と胸を張って人生を歩んでほしいと願っています。

修士、修士（専門職）、法務博士（専門職）の学位を授与されたみなさんの中には、独創性あふれる修士論文を完成させた人も、それぞれの専門分野の精華、つまり真髄を垣間見た

人もおられるでしょう。それを人生の基礎として、それぞれの進路においてますます研鑽を積んでいただきたいと思います。とりわけ、博士課程に進学する人はそれぞれの専門へのさらなる沈潜と同時に広い学識が求められます。

博士の学位を授与されたみなさんには、専門を掘り下げ、他人が成し得なかった独創的な仕事を成し遂げたという誇りと自信がこれからの人生の大きな支えとなります。切り拓いた研究は、歴史に留められるものもあるでしょう。また、テーマそのものは、時の流れの中で陳腐化していく運命にあるかもしれません。しかし、それを作り上げる過程で傾けた努力や体験した悩み、成し遂げたときの喜びは、みなさんの人格を磨いてきたはずです。これからの人生で経験する苦しいときや追いかけるべき課題を見失ったときには、博士論文の完成に費やしたこれまでの日々を思いだして、チャレンジする強い意志と信念を呼び戻していただきたいと思います。

本日は、明治の文豪夏目漱石の隻眼せきがんの一端を紹介したいと思います。それは芸術を論じた随筆『素人と黒人』しろうとくろうとの中で展開されるものです。非常に短く、十分に推敲された作品ではないと本人は述べていますが、漱石はいわゆるプロ、プロフェッショナルを普通に使われる「玄人」でなく「黒い人」、黒人と書き、「くろうと」と読ませています。その作品で玄人の陥りやすい視野狭窄のメカニズムを明らかにし、その弊害に警鐘を打ち鳴らしています。漱石曰く、「黒人は局部に明るいくせに大体を眼中に置かない変人に化けてくる」。ここで漱石が大体と言っているのは全体像を意味します。そして、一方「(その弊を免れている)素人は馬鹿馬鹿しいと思っても、先が黒人だと遠慮して何もいわない。すると黒人はますます増長してただ細かく細かくと切り込んでいく。それで自分は立派に進歩したものと考えられるらしい」とも述べています。このエピソードは、まさに高度に細分化を遂げた学術にも当てはまる警告ではないでしょうか。近代科学は、17世紀に活躍した自然哲学者のルネ・デカルトが主唱した要素還元論に多く依拠しています。つまり、現象を細部の単純な事象の合成ととらえ、個々の単純な事象の解析を精緻に行うことで、元の現象は理解できると考えるものです。そして、細部に分解してなお理解できないときには、さらに細かく切り刻んで研究を進めます。確かに、このようにして近代科学は飛躍的に進歩し、数々の現象の理解を大いに高めてきました。しかし、現象を要素に還元して、細部を精密に解析することだけでは、大きな輪郭をもつ根本の問題が解決できるとは限りません。みなさんもそれでは解きえない問題がいくつかすぐに頭に浮かぶことでしょう。それゆえ、黒人は細かく議論はできるが、それは全体像、すなわち本質的問題を解決する方向に深くはなっていないといったことも起こってしまうのです。一方、素人は専門家として細かく見る技術を欠きますが、その代り全体像を鮮明にとらえることができる場合が多くあります。学位を取得するまで専門を修めたみなさんにおいても、細部を分析する熱意が高ければ高いほど、全体像を忘れがちなものです。これは漱石も看破しているように、人間の一般的傾向といえるものです。みなさんには、今日を契機に、専門に加えて、全体を見る素人的な目を忘れず、さらにその目を自分の専門の社会や人生のなかでの立ち位置を常に省みることに活用してほしいと思います。

素人の効能はそれにとどまりません。漱石は次のようにも言っています。

「人の立てた門を潜るのではなくって、自分が新しく門を立てる以上、純然たる素人でなければならぬ」と言っているのです。なぜなら開拓者は新天地に初めて足を踏み入れる人のことで、切り拓いた分野においては最初は素人であったはずだからです。このことは福沢諭吉が宋史から好んで引用した「自我作古」、つまり我より「古」を作すの精神にも通じます。これは自分自身が新しい世界を作る、今風に言えばイノベーションの心持ちでしょう。みなさんが新しいことにチャレンジして、素人として率先して新世界を切り拓いてください。

みなさんのこれから進む人生において、一層の知識や経験が必要となる時がやってくるかもしれません。その際には、みなさんが学びしこの京都大学を思い出し、基本に立ち戻ってください。きっとその過程で新しい自分を発見するでしょう。また、折に触れ母校を訪れてください。みなさんと京都大学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学はみなさん一人一人の人生の基軸として力になりたいと思います。

国家の危機的な財政状況や国難ともいえる大震災の下、本学も改革待ったなしの状況に立たされています。京都大学も努力を重ね、ただ「強い」や「賢明な」だけでなく、「社会の変化を機敏に読み取り、変化にしなやかに適応できる大学」をめざしたいと思っています。みなさんにおいても、母校を温かく見守り、今後ともご支援いただきますようお願いいたします。同時に、先述べましたように、京都大学はみなさんの人生の基軸と呼べる存在になっていきたいと考えています。

最後に、本日学位を手にされました3,119名のみなさんが、持てる力のすべてを生かしきり、これまでの研鑽の過程で培われてきた豊かな人間力を今後とも磨き続け、世界のリーダーたるべくさらに高度な教養を身につけ、いきいきと活躍することを願い、私の「饒」の言葉といたします。

本日は誠にめでとうございました。

卒業式〔2010年度〕

2011（平成23）年3月24日

さる3月11日に未曾有の東北地方太平洋沖地震が発生しました。この空前絶後ともいえる巨大地震と大津波で多くのかけがえのない命が失われましたことは、疾痛惨憺の極みであります。そのうちには、今日みなさんとともにこの卒業式に参列されるはずであった本学の4回生の3名が含まれていることは、極まりなく無念であります。ご遺族の方々には、心からの哀悼の意を表します。この震災とそれに続く福島原子力発電所事故により被害にあわれている方々および被災地にご家族、ご親戚、ご友人・知人がおられる方々、また、卒業生に含まれる被災各県出身のみなさんに心からお見舞い申し上げます。今後、京都大学は熟慮断行を基本としながらも、眼前の事態から目をそむけず、また近きを釋^すてず、すみやかに被災地からの新入生や学生への支援を進めていくとともに、被災地の方々のできる限りの協力をおしまないつもりです。

本日、ご来賓の尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,775名のみなさんに学士の学位を授与する運びとなりました。この国難とも呼べる時期に卒業式を迎えることとなったみなさんは、手放しで喜ぶ気分にはなれないとは思いますが、学士課程を無事修了され、学位を得られたことに敬意を表するとともにお慶びを申し上げます。

京都大学の114年の歩みの中で、みなさんを含めて本学の卒業生の累計は、18万8,202名となりました。みなさんの前には、18万人を超える先輩が存在することになります。

いま日本は長く続いた社会の閉塞感にくわえ、未曾有の東日本大震災に見舞われ、茫然自失ともいえる状況です。みなさんは一市民として、また今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、国難ともいべきこの厳しい時代に持てる力を発揮し、世界を舞台に我が国と人類社会の未来を切り拓く使命を果たさねばなりません。

そのために、大学院進学のみなさんは専門毎に分かれて、これから学術に磨きをかけることとなります。複雑な現実については、全体像を直ちに理解することはできません。17世紀の自然哲学者ルネ・デカルトはいかに複雑な現象であれ、物事を分けて考えると科学的な思考ができるといった要素還元論的発想を示し、近代の扉を開きました。しかし、このような要素還元論にも限界があることは、我々の心の問題を考えると分かり易いでしょう。近年では心の機能をつかさどるのは脳であると考え、高次脳機能の研究とあいまって、前頭葉、側頭葉、後頭葉、脳幹など細かく研究がすすみました。それでも心の働きは見えてきませんでした。さらに脳神経、脳細胞を切り込んでいっても、まだ全体としての心は明確にはなっていません。このように、細かく分けたからといって、かならずしも事態を解明できるとは限りません。しかし、要素還元論が一定の成功を取ってきたことは軽視されてはならず、みなさんはそれぞれ細分化された各学問分野の専門家として、まず自立するよう努力すると同時に全体像を見失うことがないよう常に心がける必要があるでしょう。

卒業後、直ちに社会に羽ばたくみなさんは、職場では社会の具体的な問題にいきなり直面

することになります。古^{いにしえ}よりの都^{みやこ}京都での大学生活で身につけた知識や体験だけで対処できる問題もあると思いますが、それだけでは不十分なことも数多いと思います。常に社会のニーズを自分でとらえ、必要とされる知識を生涯学び続ける必要があるでしょう。

昔から教育は、ややもすると人から教わり、知識を授けてもらうにすぎないと思われがちですが、真の教育というのは、教え育むとあるとおり、「育む」という点が重要であり、先哲はそのための教育法をいろいろと考えてきました。世の東西を問わず教育の第一段階は、それまでに伝えられた知識を教える。教えられる側からいえば、知識を伝授される段階といってもいいでしょう。すなわち、聞いて知識を脳の中にインプットする。その段階を終えると、その次は、ある程度できあがった知識ベースを基礎に、自分で考えさせる教育段階があります。物事を考え、知識の足りないところを自分の思索で補い、必要に応じてもう一度知識を得た初期の段階に立ち戻って調査を行い、改めて知識を再構築します。それが多くの教育法のパターンであり、単純な知識の伝授だけでなく、自らが独自に考えられるようになるために有効な方法です。ここまでの二つの過程は、インド仏教伝来の「聞慧^{もんゑ}」つまり聞いてつける智慧と「思慧^{しゑ}」つまり考えてつける智慧にあたります。仕上げには第三段階の「修慧^{しゆゑ}」があり、これは実践を通じてつける智慧です。これらの三段階を「聞思修^{もんししゆ}」といいます。

学部卒業後ただちに社会に出る人は、いきなり「修」つまり実践の世界に入るといえるかもしれません。それぞれの段階において、聞思修のウェートの置き方は違いますが、やはり聞思修を進めていくことに違いはありません。今ここにいるみなさんは、「聞」と「思」についてはすでに一定程度おさめられたと思います。大学院に進学する人はさらに思索を深め、学術の世界で「修」に至っていただきたいと思います。さらに博士課程を希望するみなさんには、「聞思修」という考え方を忘れずに、あまりにも細分化された専門分野からの管見に世の中の複雑な現実を見失わないようにしてもらいたいと希望します。

本学の自学自習は、まさに「聞」を終え、「思」索に入る段階で、自分で考えて隙間を埋めるということです。また、「聞」が足りなければもちろん前に戻ります。そのときに、安易にインターネットに頼るのではなくて、人類の学術の精華・真髄ともいべき古典書籍の玩味などを通じ、時空間を超えて広く情報を集めていただきたいと思います。そして、ときには自分の中に積み上がっている既成の知識や考え方から自らを解き放ち、自由闊達に常に自らを見直すと同時に、社会の常識、科学の知見なども常に自らの考えに基づいて根本から再検討していただきたいと思います。それが自学自習の根本です。それが何のためかというところ、最終的には「修」、実際の行動、人生の歩み方というところに繋がるものであるからと私は考えています。そして、このプロセスを円滑に進め、多くの人材を今後も本学から輩出させつづけるための試みとして本学では、リーディング大学院の構想が生まれています。これまでの研究科タイプの大学院に加え、世界のリーダー育成を目指した新しいタイプの大学院の構想で、平成24年の開設を目指しています。

この卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つみなさんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業するみなさんがときには母校を訪ね、語らい、また同窓

会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。また、ご家族のこれまでの厚い支援に大学として御礼申し上げますとともに、卒業生のみなさんには、これまでのご家族の負担や支援に対し、ぜひ感謝の気持ちを忘れず、素直に感謝の気持ちを伝えてください。卒業して、社会で活躍されるみなさんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍しつつ、みなさんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もお願いします。また、残りのみなさんは、修士課程に進学され、大学院で学び、研究を続けることとなりますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じ取れるよう、バランス感覚を大切に、知勇兼備の人としてご活躍されることを願い、学士の学位を授与されたみなさんへの私の^{はなむけ} 饞の言葉といたします。

本日は誠におめでとうございました。

学部入学式〔2011年度〕

2011（平成23）年4月7日

本日、疎水の水面に桜映ゆるこの「みやこめっせ」にご参集の3,031名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございませう。ご来賓の尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学をお祝いしたいと思います。また、みなさんの長く厳しい勉学が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

さて、みなさんはいま国難ともいべき巨大地震、大津波、それに続く原子力発電所事故の渦中で、この入学式に臨んでいます。この空前絶後ともいえる巨大地震と大津波で、多くのかけがえのない命が失われました。この東日本大震災とそれに伴って起こった原子力発電所事故により被害にあわれている方々および被災地にご家族、ご親戚、ご友人・知人がおられる方々、並びに被災各県出身の入学生のみなさんに心からお見舞い申し上げます。

国を挙げて救援、復旧活動がすすめられ、復興も検討され始めたこの時期に大学に入学するということは、生涯忘れることのない記憶として残ることでしょう。そして、いま被災地を中心に日本人が互いに助け合い、整然と秩序ある行動をとり続け、日常を取り戻そうと努力している姿は、日本人が尊重してきた「和」の精神を世界に向けて示すものとなっています。そこで示される自助と共助は日本人の誇りです。被災地から離れた京都においても、被災地の苦難を分かちあい、長く心を寄せ、復旧と復興に積極的に支援していきたいものです。

東日本大震災において、現代の先端科学技術の粋を集めた各種施設が大自然の威力の前でもろくも崩れ去り、大きな被害につながりました。これを短絡的に科学の限界にとらえ、みなさんは虚無主義に捉われてはなりません。今回の大震災に関していえば、科学者は地震や大津波について科学的知見をこれまで蓄積してきました。そのうえで、その知見をもとに、行政や各種事業者がリスクやハザードをどこまで経済的に許容するかという水準を想定し、社会は運営されてきたのです。そのような枠組みで本当に良かったのか、今後の社会のあり方をみなさんにもぜひ真剣に考えていただきたいと思ひます。

今回の東日本大震災を契機にすこし視野を広げて考えてみたいと思ひます。一見安定しているように見える大地は、実は変動を続けており、本質的に不安定であり、その上に私たちは営々と文明を築いてきました。さらに限られた資源を無限であるかのように錯覚し、経済成長を通じて生活の安楽さと利便性のみを追求していると次世代にとられかねない日々を送っています。地球が人類文明を支えきれなくなりつつあることを様々な徴候が示していることに鑑みると、我々はそろそろ文明のあり方を再考する時期に来ているのではないかと思ひます。そのためにみなさんは歴史から過去を学び、それに現代の知識を組み合わせることによって、将来の長期的なビジョンやあるべき姿というものを構想できる人間にならなければなりません。

今の日本には、地球社会のリーダーに必要とされる、将来をはるかに見通す力を持つ人間はそう多くないように思ひます。例えば、みなさんの多くはこれからまだ50年以上生きてい

くことになるでしょうが、その半世紀先まで見通せる人間というのはそう多くありません。京都大学に入学したみなさんには、遠い将来を見通し、未来を創造できる人間をぜひ目指してほしいと思います。将来を見通すためには、学術が積み重ねてきたデータの蓄積を咀嚼する能力が必要です。その上に立って、何をすれば、自分が理想とする、あるいは世界が理想としうる社会を維持発展させることができるか、ということを考えることができます。その際に、あるべき未来の姿を構想するためには、確固たる世界観や哲学が必要です。さらに、現代社会は高度に分業化された専門家社会です。大学の一つの機能は、その専門家を養成することにあります。専門分野に深く切り込んで、既存の知識に何らかの新しいものを付加するという貢献、それが研究の営みです。やがて小さな貢献が集まり、壮麗な学術体系が構築されるわけです。換言すると、これこそが学術を形作ってきたのです。みなさんもその歴史的な営みに、学士課程の仕上げとなる卒業研究等で、ささやかながらも参加していくことになるでしょう。ただし、専門家は専門に専心するあまり、部分に埋没し、全体像を見失う危険があります。その弊に陥らないためにも、自らが専攻する学問分野の基礎と応用にかかる知識や技術を身に付けるだけでなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識を教養として貪欲に吸収し、それをもとに多元的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。そして、過去に縛られることなく、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を作り、それに肉付けし、4年後には今の自分と違う自分をそこに見いだしてほしいと思います。

京都大学における学びの機会は、真理探究の道を自らすすむ者にあまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。決してあきらめず、「闊達な対話」と相手の立場、考え方も尊重することを忘れず、あわせて自らも重んじるようところがけてください。この自らを重んじるという「自重自敬」の考えは、明治30年の本学の第1回入学宣誓式に由来します。その心得を説かれた木下廣次初代総長は、書としてその言葉を本学に残してくださいました。その書は現在総長応接室を飾っています。また、木下廣次総長は「自重自敬」の心得に続け、「故に諸君は、既に後見を脱したる者として吾人は、諸君を遇するなり」と述べて、「自立独立」を学生に勧めておられます。ご家族や関係者の皆様には、大学生活のために一定の扶助をお願いすることにはなりますが、私たち教職員同様、入学生を独立した個人として処遇されることをお願いいたします。

現在、京都大学には、およそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は、将来きっとみなさんの人生を豊饒なものにすることでしょう。学業において出会う人のみならず、課外活動やその他の出会いを大切に、生涯の知己、友人を得、多くの人々と考えを交換し、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日も臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後に、みなさんに江戸時代に高い精度を持つ「大日本沿海輿地全図」と呼ばれる実測地

図を作製した、伊能忠敬の心意気とその言葉を紹介したいと思います。伊能忠敬は50歳で隠居し、心機一転し、19歳も年下の高橋至時（よしとき）の門下に入り、西洋天文学、数学、西洋暦学を学び、正確な測量技術を確立し、55歳の1800年から71歳の1816年まで17年間全国各地を測量し、日本国の実測地図のデータを集めました。そして、目にした書物によると伊能忠敬は「精神の注ぎ候のところより自然と妙境に入り、至密の上の至密をも尽くし候」という言葉を残したそうです。その大意は、一点に精神を集中すれば、勉強や仕事に自然と興味が湧き、最上の結果に至ることができるということです。みなさんも自らの集中すべき一点を見つけ出し、そこで刻苦精励されることを願います。そして、健康に留意し、様々な自分の可能性に目を向け、力一杯活躍され、誇りある京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。

大学院入学式〔2011年度〕

2011（平成23）年4月7日

本日、京都大学大学院に進学される修士課程2,217名、専門職学位課程323名、博士後期課程899名のみなさん、おめでとうございます。列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長、および教職員とともにみなさんの進学をお祝いしたいと思います。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

さて、我が国は東日本大震災に見舞われ、まさに国難のさなかにあります。大自然の猛威の前に人々の築き上げてきた生活がもろくも崩れ去り、1万人を大きく超える多数の犠牲者を出しました。みなさんとともにご冥福をお祈りしたいと思います。さらに福島第一原子力発電所の事故が続く、放射性物質の流出とそれに伴う様々な問題が引き起こされました。この原子力災害の終息には、なお幾多の困難を乗り越えねばなりません。このような未曾有の渦中で、みなさんはこの大学院入学式に臨んでいます。この大震災と原子力発電所事故により被害にあわれている30万人以上の方々、被災地にご家族、ご親戚、ご友人・知人がおられるの方々、並びに被災各県出身のみなさんに心からお見舞い申し上げます。

国を挙げて救援、復旧活動がすすめられ、復興も検討され始めたこの時期に進学するということは、みなさんにとって生涯忘れることのない記憶として残ることでしょう。巻き込まれたプレートの跳ね上がりにより起こる巨大地震と大津波は、これまでも幾度となく我が国を襲ってきました。研究者は事実を調査し、知見を蓄積してきましたが、地震などの規模の想定を社会に自ら提供するわけではありません。安全のための規模想定は、各種事業者や行政が行うものです。その想定された規模を超える巨大地震と大津波のため、今回は原子力発電所も被害を被ることになりました。そのような極めて過酷な状況の中、いま被災地を中心に日本人が互いに助け合い、整然と秩序ある行動をとり続け、日常を取り戻そうと努力している姿は、日本人が尊重してきた「共生」の精神を世界に向けて示すものとなっています。そこで示される共助の精神は日本人の誇りです。世界の大学の学長から届く手紙には、お見舞いとともにこの日本人の気高い精神と復興への強い決意への称賛が述べられています。私たちは被災地から離れた京都においても、被災地の苦難を分かち、長く心を寄せ、大学人として、また個人として、復興に協力する決意を新たにしなければなりません。

さて、みなさんが進学する修士課程では、学士課程で身に付けた知識や教養の蓄積の上に、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身に付けるなど、専門家として独り立ちできるよう体系的な教育が行われます。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う新たな教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍しうる人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信していくよう指導が行われます。これら大学院において、みなさんは専門分野において世界の最先端に躍り出ることを目指してください。その努力は、きっと遠からず実を結ぶものと私は確信しています。

今回の東日本大震災によって、現代の都市や農村の社会的インフラや生活基盤が大自然の威力の前にもろくも崩れ去り、甚大な被害につながりました。しかし、これを短絡的に人間の力の限界ととらえ、虚無主義や科学技術不信に陥ってはなりません。確かに、この未曾有の大震災を目の当りにして、科学技術や人間社会の脆弱さを感じたことでしょう。しかし、歴史に学べば、人類はいかなる大災害や苦難も人知と科学技術によって乗り越えてきました。

今回の震災を契機に、みなさんは今後被災地にどのような手助けをしようか、どういう貢献が大学院生としてできるだろうか、さらには安心安全な世界をつくるにはどうしたらいいか、専門を極めることだけでいいのだろうか等、様々に悩み、考え始めていることと思います。

災害からの復興には、あらゆる視点からの様々な専門知識が必要とされます。すなわち、非常時、復旧時、復興時といった異なる段階や、我が国や世界といった異なる場所で、それぞれ緊急性の高いミッションを機動的に成し遂げるために、広範囲の専門知識が必要です。ゆえにみなさんは、今回の大災害から生まれた問題意識を忘れず、まず自分の専門分野を通じた貢献を考えてください。さらにそれを長い時間軸の上で大きく展開して、日本、アジア、世界全体を視野に、みなさんが生き抜いていかねばならない今後50年のあるべき姿を見通し、地球社会のリーダーのひとりとして活躍できるよう研鑽を積んでください。みなさんの多くは、自分自身の素材としての価値を十分には認識できていないと思います。大学院修士課程に進学したほぼ45年前には私も自信が持てず、人生についてはっきりした見通しをも持つことができなかつたことを覚えています。周辺の友人も同様でした。しかし、現在多くの友人は、日本あるいは世界のリーダーとして活躍をしています。みなさんは確実に社会のリーダーとなる人材です。どうか世界の中心的役割を担い始める10年先に社会のリーダーとして必要とされる知識体系や考え方を準備しておいてください。そのためにも、リーダーとして世界で活躍する際に必要となる語学力、リテラシー、説得力、企画力、発信力、感化力などの人間力を涵養し、しなやかで豊かな人間力を身に付ける必要があります。この二つこそが大学院で身に付けるべき高度な教養というものではないでしょうか。玉も磨かざれば光なしです。大いに研鑽してください。

また、本学には大学院を中心にして1,700名を超える留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学生交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の様々な機会を提供しています。また、多くの京都大学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に拡げて、是非積極的に海外に雄飛してほしいと思います。今から157年前の安政元年3月27日の夜、吉田松陰と金子重輔は死を覚悟で鎖国の掟を破り、海外渡航を夢見、米国のポーハタン号に乗船し、「吾等米利堅ニ往カント欲ス」と筆談で乗船を交渉しました。しかし、その願いは無念にもペリー艦長には届きませんでした。ぜひ、みなさんには松陰のような熱い思いを持ち、早くから世界を舞台にしてほしいのです。それは何事にも代え難い有意義なものとなるでしょう。私も初めて海外に出た若い時代の経験を今でも忘れることはありません。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概を持ったリーダーを必要としています。我が国あるいは人類の未来は、みなさんを含めてわれわれ自らの手で拓かねばなりません。みなさんが京都大学の大学院生として、さらなる高みを目指し、既成概念にとらわれず、常に「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくと同時に、自らを心身ともに磨いていかれることを願い、私のお祝いのことばといたします。

みなさんの活躍を期待しています。大学院進学、おめでとうございます。

博士学位授与式〔2011年度〕

2011（平成23）年9月26日

本日、博士の学位を授与される224名の皆さん、おめでとうございます。今日の晴れの舞台を迎える皆さんの中には46名の女性と49名の留学生が含まれています。これまで京都大学が授与した博士号は累計38,682名になりました。列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、晴れやかな気持ちでこの学位授与式へご臨席いただいているものと思います。本日学位を授かる皆さんは、周りの方々からこれまで受けた長年にわたる支援に対して言い尽くせない感謝の気持ちで一杯のことと思います。私たち教職員一同も、ここに至るまでのご家族の様々なご苦労やご支援に対して御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと思います。

これまで皆さんの在籍してきた大学院は厳しい研鑽の場であったかと思います。皆さんの中には、何度も挫折しそうになり、苦悩の日々を経験された人もいるでしょう。皆さんは幾多の苦難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を本日、京都大学博士学位の授与という形で認められました。皆さんには本日から誰にも臆することなく、先人に何するものぞとの気概を胸に、これまで磨きあげてきた個性を發揮し、修めた専門を生かして、未曾有の国難に見舞われた日本を蘇らせ復興させる使命を果たさねばなりません。学問とは真実をめぐる人間関係であると私は信じています。皆さんには、人の苦しみや痛みを知り、相手の立場や状況をよく斟酌できる人として研究成果の華のみならず、さらに豊かな人間関係の華を咲かせるような人生を歩んでほしいと願っています。

皆さんには、専門を極め、他人がこれまで到達したことのない未知の領域で独創的な仕事を成し遂げたという誇りと自信がこれからの人生の大きな支えとなることでしょう。皆さんは専門分野の高度に細分化されたところで十分な成果を生み出すことができました。学術の発展を木の生長に例えれば、知の木の突端で、新しい研究を上積みして、枝を伸ばしたということができるでしょう。このことは誇りにすべき重要な経験だと思います。その経験においては、新しいことを作り出すことを目指し、手法を身につけ、成果をまとめあげ、創造に関する突破力というものを身につけたといえましょう。しかし、これからは、伸ばした小枝をさらに伸ばすだけでなく、知の根源にかえり、大きな幹をつくることが社会から期待されています。そのためには狭い専門を超えて、幅広い視野が必要となります。視野を広げるための努力をすることも重要になってきます。そういうことをいま自覚しないと、どうしても自分の狭い専門分野に埋没してしまい、社会の要求からずれていくことになりがちなので、ぜひ心してほしいと思います。

皆さんも「隗より始めよ」という言葉は耳にされたことがあると思います。中国の戦国時代に内戦の収束に名を借り、自国を征服しようとした斉(せい)への報復の志を持つ燕の昭王は、富国強兵のために賢者を招聘する相談を国の有力者の一人、郭隗にもちかけました。郭隗は、千里を走り、千金にも値する名馬の骨を五百金で買って来た人の逸話を紹介し、使い物にならない死馬に五百金を払うという一見無意味な行為が、名馬を集める並々ならぬ意志を広く世間に宣伝することにつながり、結果的に目的の達成につながるということを教えたのです。そして、彼は「王様が賢者をどうしても招きたいとおっしゃるのであれば、まずこの郭隗から始めてはいかがでしょう。そうすれば、この隗でも大切にされるのだからと賢者が続々やってくることになるでしょう」と自薦を行ったのです。これほどまでに見事な自薦があったのでしょうか。ここで私が注目したいのは、その自薦のレトリックの見事さではありません。自薦できるという郭隗の心の準備についてです。常日頃からの自鍛自恃がなければ絶対こういう言葉は出てきません。郭隗のような境地を皆さんも目指してほしいと思います。例えば、学問の分野でも、私の構築した理論が重要だからこれを広く採用してくださいといえるような、そういう自信を持てるように、日々己を鍛えてほしいと思います。最終的に燕の昭王は戦国時代屈指の名将とうたわれる楽(がく)毅(き)を得て、斉(せい)への復讐を果たしたことは皆さんもご承知のことと思います。

皆さんの学びは今日で終わったわけではありません。むしろ長い人生、これからさらに深刻な難問に立ち向かっていかねばなりません。その際には、皆さんが学んだ、この京都大学を思い出し、学びの初心に立ち戻ってください。きっとその過程で新しい自分を発見するでしょう。また、折に触れ母校を訪れてください。皆さんと京都大学との縁(えにし)は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生を支える確かな基軸になりたいと思います。

国家の危機的な財政状況や国難ともいえる大震災の下、京都大学もこれまで以上に努力を重ね、ただ「強い」や「賢明な」だけでなく、「社会の変化を機敏に読み取り、変化にしなやかに適応できる大学」を目指したいと思っています。そして、社会から期待される京都大学の機能強化に一層邁進していかねばなりません。皆さんも、母校を温かく見守り、今後とも支援いただきますようお願いいたします。同時に、先に述べましたように、京都大学は皆さんの人生の基軸と呼べる存在になっていきたいと考えています。

最後に、本日学位を手に入れました224名の皆さんが、持てる力のすべてを生かしきり、これまでの研鑽の過程で培われてきた豊かな人間力を今後とも磨き続け、世界のリーダーたるべくさらに高度な教養を身につけ、いきいきと活躍することを願い、私の饒(はなむけ)の言葉といたします。

本日はまことにおめでとうございます。

大学院学位授与式〔2011年度〕

2012（平成24）年3月26日

本日、京都大学から修士の学位を授与される2,138名の皆さん、修士（専門職）の学位を授与される144名の皆さん、法務博士（専門職）の学位を授与される159名の皆さん、博士の学位を授与される667名の皆さん、誠におめでとうございます。

学位を授与される皆さんの中には、710名の女性と318名の留学生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した修士号は65,639、修士号（専門職）は771、法務博士号（専門職）は1,259、博士号は39,349となります。ご来賓の沢田敏男元総長、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

この会場には、学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様が多数お集まりのことと存じます。学位を授かる皆さんは、これらの方々からこれまで受けた長年にわたる支援に対して感謝の気持ちをこの式典の後、率直に伝えてください。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様方の様々なご苦勞やご支援に対して御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと思います。

さて、これまで皆さんの在籍してきた大学院は厳しい研鑽の場であったかと思えます。皆さんの中には、何度も挫折しそうになり、苦悩の日々を経験された人もいるでしょう。皆さんはそれらを乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を本日、京都大学学位の授与という形で認められました。これからは何のものにも臆することなく、授けられた学位を誇りとし、身につけた専門を生かして、そのうえで自らの豊かな個性を発揮し、未曾有の国難に見舞われた日本を蘇らせ復興させ、さらには大いに日本国を発展させる大きな原動力になってほしいと願っています。また、将来的には人類が直面する多岐にわたる困難な問題、課題に果敢に挑戦し、それらの問題の解決に大きな貢献をされることを期待します。「学問とは真実をめぐる人間関係である」と私は信じています。人の苦しみ、痛みを敏感に感じ、相手の立場、人類社会の状況をよく斟酌しながら、多くの人々と豊かに綾なす人生を歩まれんことを願っています。

修士の学位、修士（専門職）、法務博士（専門職）の学位を授与された皆さんの中には、独創性あふれる学位論文を完成させたり、大学院において専門分野の真髄にふれることができた方も多数おられるでしょう。小成に安んずることなく、今後ますます研鑽を積んで社会において大輪の花を咲かせていただきたいと思います。

博士の学位を授与された皆さんには、専門を深く穿ち、他人が成し得なかった独創的な仕事を成し遂げたという誇りと自信がこれからの人生の力強い推進力となることでしょう。あげられた研究成果は今後、時の試練を経て、一層輝き続けるもの、あるいは陳腐化していくものに分かれます。しかし、それを作り上げる過程で傾けた努力や体験した悩みや成し遂げたときの喜びは皆さんの人格を磨いてきたはずです。これからの人生で直面する苦しいときや追いかけるべき課題を見失ったときには博士論文の完成に費やした研鑽の日々を思

いだして、チャレンジする強い意志と信念を呼び戻していただきたいと思います。

昨年は想定外という言葉が巷に氾濫しました。想定とは「想」を定めることであり、思考の範囲を確定することです。その想定の外のことであり、思考の範囲を越えたので我々の手に負えませんでしたと言うようでは、あまりに無責任と多くの国民は日本のリーダーたちや科学者に憤ったのではないのでしょうか。今後皆さんが、社会のリーダーになっていくためには、遠い未来のビジョンを示せなくてはなりません。私自身にとっても30年先のビジョンは示し難いものです。100年後というと、さらに難しい。しかし、手がかりがないわけではありません。100年後の世界を見ようと思ったら、知識を集め、これまでの歴史を振り返り、足元の現実を見、そして想像力を働かせることが必要です。我々が今生きている世界の現実とこれから実現する技術や社会の進歩を考えて、何年後には世の中はどう変わるであろうかを見通していくことが重要なのです。これが「想」の中の一つ「予想」です。しかし、それだけでは未来のビジョンにはなりません。確固とした意志の下、100年目にはこういう世界を作りたいという「夢想」と「理想」があってこそビジョンは生まれます。「空を飛びたい」という夢想が現実になって、飛行機は生まれました。現実には夢想の実現を妨げる様々な桎梏^{しごく}、すなわち足かせ手かせがあります。高い志を持つことでそれと奮闘し、乗り越え、夢想は現実のものとなるのです。不羈不絆^{ふきふはん}、つまり何ものにも束縛されない夢想の力は突破に向けての大きな原動力になります。しかし、それだけではなお不十分です。夢想は個人の夢にとどまることが多く、社会全体にその夢が共有されるとは限らないからです。社会全体で共有し得るものこそ「理想」です。これら予想・夢想・理想をたてる能力が無ければ、ビジョンを語ることは不可能なのです。最終的にその全ての「想」を上手く使っていくことが、未来を切り拓くためにはとても重要です。それは同時に社会や文明を設計することにも通じます。これらの能力と強固な意志こそがリーダーの持つべき重要な資質であり、皆さんにますます鍛えていただきたいと私が希望するものです。

皆さんのこれから歩む人生において一層の知識や経験が必要となる時がやってくるかもしれません。その際には、皆さんが学びしこの京都大学を思い出し、基本に立ち戻ってください。すると予想もしなかった角度から光がさし、新たな可能性を見つけ出すことができるでしょう。また、折に触れ母校を訪れてください。皆さんと京都大学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生の基軸になりたいと思います。

国家の危機的な財政状況や国難ともいえる大震災の下、本学も改革待ったなしの状況に立たされています。京都大学は今後一層努力を重ね、常に物事の根源を見つめ、根源を解き明かそうとする大学、基本すなわち本を務める大学として世界一をめざしたいと思っています。皆さんにおいても、母校を温かく見守り、ご支援いただきますようお願いいたします。

最後に、本日学位を手に入れました3,108名の皆さんが、持てる力のすべてを生かしきり、これまでの研鑽において培われてきた豊かな人間力を今後ともさらに磨き続け、世界のリーダーたるべく高度な教養を身につけ、いきいきと活躍することを願い、「想」という言葉を私の餞^{はなわけ}といたします。

本日は誠におめでとうございます。

卒業式〔2011年度〕

2012（平成24）年3月27日

本日、ご来賓の尾池和夫前総長、列席の副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,818名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深く敬意を表するとともにお慶びを申し上げます。京都大学の115年の歩みの中で、皆さんを含めて本学の卒業生の累計は、191,105名となり、皆さんの前に約19万人もの先輩が歩んでいることとなります。

併せて、ご家族ならびに関係者の皆様よりいただいた今日の卒業式を迎えるまでの数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。そして、卒業生の皆さんには、これまでのご家族の負担や支援を肝に銘じ、この機会に感謝の気持ちをご家族に率直に伝えるよう希望します。

我が国は、昨年3月11日に未曾有の東日本大震災に見舞われ、復興への力強い^{つよおと}足音は聞かれるものの、まだ道は半ばという状況にあります。この厳しい時代に皆さんは一市民として、また、今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、持てる力を発揮し、世界を舞台に我が国と人類社会の未来を切り拓いてほしいと思います。

そのために大学院進学の皆さんは、専門ごとに分かれてこれからさらに学術に磨きをかけることに力を注いでください。一方、社会に羽ばたく皆さんは、職場では社会の様々な問題とこれから日々格闘していかねばなりません。いずれの道にすすむにせよ、これから歩む長い人生において大学生活で身につけた知識や体験ではまだまだ十分とはいえ、途方に暮れるような、試練に直面することでしょう。その際には、大学での学びを基礎に常に柔軟かつ強靱に思いをめぐらせ、道を切り拓いてほしいと思います。

芸術の世界においては、芸が観客の心に染み入るには、作りごとと実際のどちらともいいがたいような微妙な兼ね合いが大切であるといわれています。虚のみならず、実のみならず、その境界である皮膜にこそ芸の妙があると、この虚実皮膜論は江戸時代の劇作家近松門左衛門が語ったものとされています。

私は、この虚実皮膜論は芸のみならず、人生そのものにも通じると思います。我々は日々の思考において、「虚」と「実」の双方をめぐらしています。「虚」には、「実」でないこととして、今現実のものとはなっていないけれど、「こうしたい、こうありたい」という内容を含めることができます。これは当然まだできておらず、実現していないものです。例えば、理想や夢といったものを「虚」に数えてもいいでしょう。一方で、「実」、すなわち現実是我々の周りに確かに存在します。現実から離れすぎると何も具体化することはできません。我々は、この「虚」と「実」を行き来しながら、そのどちらかに埋没するのではなく、その虚実の皮膜で起こるせめぎあいを通じて、心にある意志をこの世の中で実現させていく存在なのではないでしょうか。

学問の世界にも虚実があるとされます。学問の虚実は虚学と実学で代表されます。実学は平たくいえば、実際に役に立つ学問であり、虚学はそうではない学問、すなわち直接又は今

すぐ何かの役には立たない学問です。皆さんの学んできた学問分野がどちらに分類されるかを議論してもあまり意味はありません。その境界はかなりあいまいだからです。

それよりむしろ学問における「虚」と「実」の役割を考えることの方が重要です。そもそも研究は、理性の力で「実」を見ながら「虚」を追及するという形です。いいかえると、研究者の研ぎ澄まされた感性で実の根源を探りながら、頭の中で「虚」の世界を構築し、「実」の根源を解明していこうとします。このように、学問は、実体をもとに、実体から離れた抽象論を積み重ね、作り上げられていくものなのです。事実を集積するだけでは学問とはいえず、それらを抽象化して、原理原則を打ち立てることに学問の真骨頂があり、それがひいては幅広い「実」につながっていくものなのです。その意味で、学問もその本質はこの虚実のせめぎあい、それが行われる虚実皮膜にありといえるのかもしれませんが。

この虚実皮膜で抽象化されていることは、一種の理念と現実の格闘とみなしてもいいかもしれませんが。志によってデザインされたこの虚実皮膜にこそ人生の醍醐味と真実があります。そして、虚実皮膜の厚みや豊かさを決めるのが、皆さんのこれまで培ってきて、今後ますます蓄積しなければならない、教養なのです。これからも教養を深めることを怠ってはならない所以です。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんがときには母校を訪ね、語らい、また、同窓会活動の場として、また、生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。

卒業して、社会で活躍される皆さんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍されることと思いますが、一方で皆さんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じ取れるよう、バランス感覚を大切に、知勇兼備の人としてご活躍されることを願い、「虚実」の間を良く考え生きていかれることを期待し、学士の学位を授与された皆さんへの私の^{はなむけ}言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

学部入学式〔2012年度〕

2012（平成24）年4月6日

本日、花曇りにかすむ東山を望むこの「みやこめっせ」に参集の3,027名の皆さん、京都大学に入学おめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、列席の副学長、各学部長、部局長、および教職員とともに、皆さんの入学をお祝いしたいと思います。また、皆さんの長く厳しい勉学が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまで皆さんを支えてこられましたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

昨年3月11日に起こった東日本大震災による国難は今なお続いています。国を挙げての復旧や復興は道半ばにも至っていません。被災地から離れた京都においても、長く心を寄せ、被災地の苦難を我がこととし、復旧と復興を積極的に支援し続けていかなければなりません。この時期に大学に入学する皆さんはこのことを常に考えつづけ、自ら行いうる貢献を主体的に行っていくべきと思います。

震災後、地球社会のリーダーとして将来ビジョンを描ける人間がそう多くはないことに私は大きな危機感を抱くようになってきました。例えば、皆さんの多くはこれからまだ50年以上生きていくことになるでしょうが、その半世紀先まで見通せているのでしょうか。京都大学に入学の皆さんには、日本のリーダーとして、遠い将来を見通し、未来を創造できる人間になってほしいと思います。将来を見通すためには学術が積み重ねてきたデータの蓄積を咀嚼する能力が必要です。その上に立って、何をすれば、自分が理想とする、あるいは世界が理想とする社会を維持発展させることができるかを考えなければなりません。その際に、あるべき豊かな未来の姿を構想するためには、確固たる世界観や哲学や志が必要です。また、私たちが生きている現代社会は高度に分業化された専門家社会です。大学の一つの機能はその専門家を養成することにあります。専門分野に深く切り込んで、既存の知識に何らかの新しいものを付加するという貢献、それが研究の営みです。やがて小さな貢献が集まり、壮麗な学術体系が構築されていきます。これこそが学術を形作ってきたのです。皆さんもその歴史的な営みに、学士課程の仕上げとなる卒業研究等で、ささやかながらも参加していくことになるでしょう。ただし、専門家は専門に専心するあまり、部分に埋没し、全体像を見失う危険があります。その弊に陥らないためにも、自らが専攻する学問分野の基礎と応用にかかる知識や技術を身につけるだけでなく、高校時代に十分に古典などに親しむことができなかつたと思われる皆さんにこそ、大学においてグレートブックスに代表される古典を紐解いてほしいのです。そして、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識を教養として貪欲に吸収し、それをもとに物事の本質を見抜き、多元的に判断する力量を鍛えてほしいと願います。そして、過去に縛られることなく、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を形作り、それに肉付けし、4年後には今の自分と違う自分をそこに見いだしてほしいと思います。

併せて、皆さんは時代が要請する国際性を養う必要があります。それは単に外国語ができ

ということではなく、歴史に学び、自国の文化をしっかりと背景に持ちながら、自分の考えを国際社会で主張できる論理的な思考能力、発言能力、自分の意見を恥ずかしがらずにいえる積極性や自主性を備えることにほかなりません。そのためには練習や経験も必要です。ぜひ大学時代に、十分に練られた計画と準備の下、海外留学を経験してほしいと思います。大学として体制を整備し、皆さんの雄飛をできる限り支援したいと思います。

新たに大学生活を始められる皆さんに一つ質問をしたいと思います。皆さんはこれまで絶望したことがあるでしょうか。この唐突な質問には原典があります。評論家亀井勝一郎の『愛の無常について』のなかで、亀井は自分がもし大学の入学の試験官であったなら、必ず尋ねてみたい質問としてこの問いを挙げています。なぜ入学を許され、未知の新たな世界に心躍らせている皆さんにこのようなことを尋ねるのか。それは、皆さんに青春における絶望の意義を考えてもらいたいからです。亀井は次のようにいいます。「解決しがたい問題の、解決しがたい所以が、骨身に徹してわかり、自己の非力さと空しさが痛感されたとき、人は絶望します。」そして、動物や子供は絶望することはできないと述べた後、人間に成りかかっている人間だけが絶望でき、絶望こそが人間として生まれ変わるための陣痛にほかならず、さらに絶望しない青春はどこかにごまかしがあると思わねばならないとさえいっています。かくして、人間判断の基準として絶望を問うことになるわけです。これまでに絶望を経験された皆さんは、絶望までの自己から新たな自己に生まれ変わっています。しかし、安心は禁物です。更なる難問が控えているかもしれません。皆さんはいま、和辻哲郎のいう「人生の最も大きい危機の一つ」である青春を迎えています。そこでは肉体の成長と澁刺とした感受性が皆さんを享楽の世界に誘惑します。そのことが皆さんの前に解決しがたい問題をもたらす原因となることが多いのです。「性急と絶望は、青春の特徴」と喝破した亀井の言葉を深くかみしめてほしいと思います。

京都大学における学びの機会、真理探究の道を自ら進む者にあまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。決してあきらめず、「闊達な対話」と相手の立場、考え方も尊重することを忘れず、あわせて自らも重んじるようこころがけてください。この自らを重んじるという「自重自敬」の考えは明治30年の本学の第1回入学宣誓式に由来します。その心得を説かれた木下廣次初代総長は書としてその言葉を本学に残してくださいました。その書は現在総長応接室を飾っています。また、木下総長は「自重自敬」の心得に続けて、「故に諸君は、既に後見を脱したる者として吾人は、諸君を遇するなり」と述べて、「自立独立」を学生に勧めておられます。私はそれに加え、自らを鍛え自分を恃みと出来るようにする「自鍛自恃」を求めたいと思います。これからご家族や関係者の皆様には大学生活のために一定の扶助をお願いすることにはなりますが、私たち教職員同様、入学生を独立した個人として処遇されることをお願い致します。

現在、京都大学にはおよそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は、将来きっと皆さんの人生を豊饒なものにすることでしょう。学業において出会う人のみならず、課外活動やその他の出会いを大切

に、生涯の知己、友人を得、多くの人々と考えを交換し、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日も臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後に、司馬遷の史記に「時は得難くして失い易し、時は時なり」という言葉があります。機会は得がたく失いやすいもので、さらに今が絶好の機会であることは見過ごされがちです。皆さんの前にあるこの機会を主体的にとらえ、澁刺と輝く京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。

大学院入学式〔2012年度〕

2012（平成24）年4月6日

本日、京都大学大学院に進学される修士課程2,234名、専門職学位課程329名、博士後期課程884名の皆さん、おめでとうございます。ご来賓の長尾 真元総長、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長、および教職員とともに皆さんの進学をお祝いしたいと思います。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

我が国は、昨年3月11日に東日本大震災に見舞われ、この国難からの復旧や復興のさなかにあります。国を挙げての復旧や復興が道半ばにも至っていないこの時期に進学することを皆さんは片時も忘れてはなりません。そして、我々は被災地から離れた京都においても、被災地に長く心を寄せ、その苦難を我がこととし、大学人として、また個人として、復興に協力する決意をここに新たにすべきです。

震災を契機に、今後被災地にどのような手助けをしようか、どういう貢献が大学院生としてできるだろうか、さらには安寧の世界をつくるにはどうしたらいいか、専門を極めることだけでいいのだろうか等、様々に悩み、考え始めていることと思います。災害からの復興にはあらゆる専門知識が必要とされます。すなわち、非常時、復旧時、復興時といった異なる段階において、日本や世界といった異なる場所において、それぞれ緊急性の高い活動を機動的に成し遂げるための広範囲に及ぶ専門知識が必要です。しかし、皆さんは不幸な大災害の全体構造を常に心に置きながらも、まず自分の専門分野を通じた貢献を考えてください。さらに、皆さんが生き抜いていかねばならない今後50年のあるべき姿を見通し、地球社会のリーダーのひとりとして活躍できるような研鑽も積んでください。皆さんの多くは自分自身の素材としての価値を十分には認識できていません。私も大学院修士課程に進学したほぼ45年前にはあまり自信が持てず、人生についてはっきりした見通しを持ってはいませんでした。周りの人々も同様であったと思います。しかし、現在多くの友人は日本あるいは世界のリーダーとして活躍をしています。皆さんは確実に社会のリーダーとなる人材です。社会において中心的役割を担い始める十年先をひとまずの目処にリーダーに必要な知識体系を準備しておいてください。さらに、リーダーとして世界で活躍するには語学力、説得力、企画力、発信力、感化力などの人間力も併せ涵養されている必要があります。

さて、皆さんが進学する修士課程では、学士課程で身につけた知識や教養の蓄積の上に、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身につけるなど、専門家として独り立ちできるよう体系的な教育が行われます。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う新たな教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍しうる人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信していくよう指導が行われます。これら大学院において、皆さんは専門分野において世界の最先端に躍り出ることを目

指してください。その努力は遠からず実を結ぶものと私は確信しています。

これから大学院において、皆さんは研究の真の面白さを体験することになるでしょう。私の体験をお話すると、研究室に入ることがその始まりでした。多くの皆さんは、体育会やクラブを除けば、少人数での共同作業、共同生活をあまり経験してこなかったと思います。大学院で研究室に入ると、否が応でも共同生活を送ることになります。身近にライバルがいて、日々指導教員と密なやりとりができ、これまでとは違った生活を送ることになります。そのうえで、所属する研究室や研究グループが取り組んでいるテーマについてその舞台裏を垣間見ることになります。また、京都大学は物事の根源を尋ねること、すなわち「務本」を志向する大学であり、本質は何であり、それは何故かということが常に議論されます。その探求過程において、知識獲得のために漠然と勉強していた時には気がつかないこと、とりわけ自分はいかにわかっていないかということ、一方で自分のみならず、世の中にはこんなにわかっていないことが多いのかということがわかってきます。論語に「これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり」という言葉があります。要するに、わかったことの認識のみではまだ足りず、わからないことをわからないと正しく認識することによって、真の理解に到達するということです。無知の知ならぬ、不知の知といえましょう。ここまでくれば後は簡単です。「よし、私が、誰も気がついていないこれをやってみよう」とか、「まあ他人がやっているかもしれないけれど、私もそのことについてわかりたい」と独創への船出が自然に行われます。このように研究室における共同生活を通じて、はじめはおぼつかない足取りだったものが、研究を続けるうちに、「あれ、誰よりも私のほうが良く知っている」ということに気がつき、それが自信に繋がって、研究に邁進する原動力となります。これは私の体験にすぎませんが、皆さんには皆さんの機会が用意されています。これからの大学院での時間を生かし、皆さんのみずみずしい感性で研究の真の面白さを味わい尽くされることを期待しています。

本学には大学院を中心にして1,800名を越える留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学生交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の多様な機会を提供しています。また、多くの京都大学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に拡げて、ぜひ積極的に海外に雄飛してほしいと思います。それは何事にも代え難い有意義なものとなるでしょう。私も初めて海外に出た若い時代の心の高揚を今でも忘れることはありません。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概を持ったリーダーを必要としています。我が国あるいは人類の未来は我々自らの手で拓かねばなりません。皆さんが、京都大学の大学院生として、さらなる高みを目指し、既成概念にとらわれず、常に「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくと同時に、自鍛自恃の精神で自らの心身を磨いていかれることを願い、私のお祝いのことばといたします。

皆さんの活躍を期待しています。大学院進学、おめでとうございます。

博士学位授与式〔2012年度〕

2012（平成24）年9月24日

本日、博士の学位を授与される200名の皆さん、おめでとうございます。その中には50名の女性と57名の留学生が含まれています。京都大学の博士号取得者は累計39,549名になりました。列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長をはじめとする教職員一同、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、晴れやかな気持ちでこの学位授与式へご臨席いただいているものと存じます。学位を授かる皆さんの今があるのは長年にわたって支えてくださった周りの方々がいるからです。私たち教職員一同も、ここに至るまでのご家族の様々なご苦勞やご支援に対して御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと存じます。

これまで皆さんの在籍してきた大学院は厳しい研鑽の場であったことでしょう。皆さんの中には、何度も挫折しそうになり、苦悩の日々を経験された人もいるでしょう。とりわけ留学生の皆さんにとって、言葉や文化の異なる異国で学を修めるということは並大抵の努力ではできません。さて、皆さんは幾多の苦難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を本日、京都大学博士の学位の授与という形で認められました。皆さんには今後誰にも臆することなく、先人、何するものぞとの気概を胸に、これまで磨きあげてきた個性を発揮し、修めた専門を生かして、東日本大震災以来これからも続く日本の再生の営みにおいてその使命を果たさねばなりません。学問とは真実をめぐる人間関係であると私は信じています。皆さんには、人の苦しみや痛みを知り、相手の立場や状況をよく斟酌できる人として、研究成果の華のみならず、さらに豊かな人間関係の華を咲かせるような人生を歩んでほしいと願っています。

多くの皆さんはこれから様々な職を経験していくことになると思います。皆さんが働く社会において自分の就きたい職に直ちには就くことができないかもしれません。しかし、その経験は皆さんを大きくします。日々果敢にチャレンジをして、幅広く様々な経験を積んで、学界、経済界、官界においてグローバルに活躍できるリーダーになってほしいと思います。

私の経験をすこしお話しさせていただくと、私は博士課程には行っていません。学位は論文博士です。工学部を卒業し、助手時代に最初は産業界の人と一緒に人工衛星を作る現場を5年ほど経験しました。産業界の現場はとても新鮮でした。産業界でも大学でもものを作ります。しかし、産業界と大学では、ものの作り方は大いに違いました。産業界が世に出す製品、特に宇宙の製品になると、厳格な安全基準があります。今でも覚えています。電子回路を作るとき、昔は半導体とか個別の部品を組み立てて作っていました。工程の最後は打ち上げの振動・衝撃に耐えるためにポッティングをします。ポッティングというのは固めることです。例えば、抵抗とかコンデンサーとか、色々なものが昔は単体部品で林のように基盤

に刺さっていました。そのままでは、ハンダづけしておいても振動でスポッと抜けることがあります。それをゴムのようなシリコン系で全部固定してしっかり留める、それがポッティングです。足元だけ固めるやり方もあれば、基盤全体を完全に封印してしまうというやり方もあります。完全封印の場合は、空気が入ると、宇宙は真空ですから、そこから空気がもれ、割れたりします。このように割れたり、隙間ができてしまうと放電し、回路が壊れてしまいます。だからポッティングというのは非常に難しい。その難しさは製品を扱う現場でないと分かりません。そして、出来上がったものに対して、会社の場合、独立機関が製品検査に来ます。"検査の鬼"と呼ばれている人がやって来て、パッと見、データを見、さらに驚いたことに、床に投げつけ、足でバンと踏みつける。うおお！ と心の中で叫びました。こんなことをやられたらこれは全部ペアになるのではと思います、一方で現実の産業界の厳しさを知ることができました。

産業界の人々と一緒になって以上のような体験をした後、理学部の人と理論と一緒に仕事をしました。その縁からさらに名古屋大学のプラズマ研究所で実験もやりました。そのあと巨大な真空チャンバーが日本で初めてできたばかりの宇宙科学研究所にいき、日夜実験を行い、先に成果をさらわれたといわれたこともあります。そういう新たな場所に行くと新たな人と出会います。その後、計算機シミュレーションにも手を広げました。東京大学の計算機センター、京都大学の大型計算機センター、名古屋大学のプラズマ研究所を渡り歩いて、多くの人達と知り合いました。やがて、スタンフォード大学、UCLA、NASA にも行くことになりました。振り返ってみると、私の若いころは武者修行の連続でした。

特定の場所に居ると、ある特定の経験しかできません。確かにそこには暗黙知があり、背景となる文化や伝統があります。それは行かなければ身に着けることはできません。しかし、同じところに長く居ると経験の幅はなかなか広げることができません。それゆえ、若いうちに自分の分野と違う、自分とは全然違う考え方を持つグループをぜひ経験してほしいのです。それに触れてみるということで、自分のいま持っているものとは違う何かを吸収できるはずです。

色々な経験をすることができたのは私にとっては幸運でした。恐らく同じ感想を抱いている人は沢山おられるでしょう。例えば、アメリカで何年も研究生活をして日本に帰って来ましたと簡単にいわれる方がおられますが、アメリカの場合は一箇所にずっと留まっていることは少ないので、きっと激しく厳しい競争や色々なことをさまざまな場所で経験してこられたに違いありません。そのことがその人の人間としての幅と知識の幅を広げています。そしてその幅が広ければ広いほど創造を生み出すチャンスが大きくなります。創造するプロセスは突き詰めて考えれば、要素間のこれまでにない新たな結合です。すると、組み合わせの数が増えれば、創造できる可能性は大きくなります。面白いことに、組み合わせの数は組み合わせられる要素の数が増えると飛躍的に増えます。高校で登場した順列・組み合わせを思い出していただければ、5個の異なったものから2つを選ぶ組み合わせの数は10通り、

要素が10になると45通り、要素が100になると4,950通りとなります。組み合わせはペアだけではないので、それらを数えていくと2の累乗のペースで可能性は広がっていくことになります。それゆえ、知識や経験が豊富な人ほど創造性は遥かに高くなるのです。ステイブ・ジョブズはきっとそういう人だったと思います。彼は私の製品は「テクノロジーとリベラルアーツの交差点」から生まれたとっています。リベラルアーツとは教養のことです。皆さんの学びは今日で終わったわけではありません。むしろ長い人生、これからさらに深刻な難問に立ち向かっていかねばなりません。その際には、皆さんが学んだ、この京都大学を思い出し、学びの初心に立ち戻ってください。そして、これまで以上に視野を拡げ、グローバルに活躍できるリーダーたるべく必須の教養を身に付けていってください。

また、折に触れ母校を訪れてください。皆さんと京都大学との縁(えにし)は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生を支える確かな基軸になりたいと思います。一方で、皆さんも母校を温かく見守り、欧米の主要大学が寄附を通じて独自財産を築き、その自立性と発展性を確保していることにも倣い、ご支援いただきますようお願いいたします。また、留学生の皆さんの先輩のうちには、母国に帰られ、国家の柱とも礎とも頼む、柱石(ちゅうせき)として、あるいは同窓会組織を通じて、京都大学や日本と母国を結ぶ「人の架け橋」として活躍されている人もたくさんいます。皆さんにもぜひ同窓会にご加入いただき、京都大学、ひいては日本との太い絆を一層充実させていただきたいと思います。それこそが、平和の基礎となる真の友好や国際協調を形づくるものなのです。

最後に、本日学位を手にされました200名の皆さんが、持てる力のすべてを生かしきり、これまでの研鑽の過程で培われてきた豊かな人間力を大いに発揮し、世界のリーダーたるべくさらに高度な教養を身につけ、いきいきと活躍することを願い、私の饒(はなむけ)の言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

大学院学位授与式〔2012年度〕

2013（平成25）年3月25日

本日、京都大学から修士の学位を授与される2,104名の皆さん、修士（専門職）の学位を授与される145名の皆さん、法務博士（専門職）の学位を授与される160名の皆さん、博士の学位を授与される622名の皆さん、誠におめでとうございます。

学位を授与される皆さんの中には、738名の女性と305名の留学生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した修士号は67,773、修士号（専門職）は916、法務博士号（専門職）は1,419、博士号は40,171となります。ご来賓の沢田敏男元総長、名誉教授、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

この会場には、学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様が多数お集まりのことでしょう。学位を授かる皆さんは、これらの方々からの長年にわたる支援に対して感謝の気持ちを伝えるように希望します。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様方の様々なご苦勞やご支援に対して御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと思います。

さて、皆さんがここに至る道程は、幾度も挫折しそうなような厳しい研鑽の日々であったかと思います。皆さんはそれらを乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を、本日、京都大学学位の授与という形で認められました。これからは何ものにも臆することなく、授けられた学位を誇りとし、身につけた専門を生かして、そのうえで自らの豊かな個性を発揮し、人類が直面する多岐にわたる困難な問題に果敢に挑戦し、それらの問題の解決に社会のリーダーとして大きな貢献をしていかれることを大いに期待しています。

修士の学位、修士（専門職）、法務博士（専門職）の学位を授与された皆さんはそれまでの課程に比べて比較的狭い領域に限定されてはいるかもしれませんが、より深い専門知識を身に付けられたと思います。近年、専門を一層深め、学んだ知識を体系的かつ柔軟に活用できる力を秘めた皆さんに対し、社会の期待は非常に大きくなっています。また、修士課程をこのたび終えて、博士課程に進学される皆さんは、小成に安んずることなく、今後ますます研鑽を積んで学術の世界でさらに大輪の花を咲かせていただきたいと思います。

博士の学位を授与された皆さんには、専門をさらに深く穿ち、自分でなければ成し得なかった独創的な仕事を成し遂げたという誇りと自信がこれからの人生の貴重な財産となることでしょう。しかし、それだけでは社会でなかなか通用しない時代になってきています。研究職のポストもそう多いわけではありません。研究者としての道を歩まなければ、博士は社会に無用なものなのではないでしょうか。私はそうは思いません。社会が博士に対して期待していることが変わってきているのです。一言でいえば、高度な専門知識だけではなく、先端までたどりついて、新しいものを切り拓いたプロセスとそれを実現させることができた人間力を生かし、社会のリーダーとなることが求められているのです。また、リーダーの自覚を持っ

て、責任をもって人々を指導していくことが期待されています。皆さんは京都大学から博士号を授与されたのですから、研究者としては世界のどこにいても、その分野では十分に通用します。しかし、皆さんは社会からは研究だけを期待されているのではないことを肝に銘じておいてほしいと思います。さらに付け加えておくと、夏目漱石に「道楽と職業」という講演録があります。そこで漱石は、「あなたがたは博士というと諸事万端 人間一切 天地宇宙のことを皆知って居るように思うかもしれないがまったくその反対で、(中略)博士の研究の多くは針の先で井戸を掘るような仕事をするのです。(中略)深いことは深いが、いかんせん面積が非常に狭い。」と言っています。一方、アメリカで博士号に当たるのは Ph.D. です。これは Doctor of Philosophyの略であり、直訳すれば哲学博士ということになります。海外では、Ph.D. を持った政治家、官僚、経営者にしばしば出会います。このことはやがて日本社会でも起こることの^{さきがけ}魁ではないかと思えます。社会は常にリーダーを必要としますから、皆さんはさらに一層高みを目指して、人々の為に働くリーダーになるべく今後一層精進を重ねていただきたいと思えます。

昨年から、京都大学では「ジョン万プログラム」というものを始めました。ジョン万プログラムは、本学の次世代を担う若手人材を対象に、海外経験等の機会を支援し、国際的な活動を奨励・促進することを目的とする全学的プログラムです。幕末の世、土佐の中浜村に生まれたジョン万次郎こと中浜万次郎は14歳の時、足摺岬でのアジ、サバ漁中に漂流、南海の孤島に漂着、アメリカの捕鯨船に救助され、やがて船長にその才能を認められ、船長の故郷マサチューセッツ州フェアヘーブンで英語、数学、測量、航海術、造船技術などを学びました。やがて日本に帰国し、それらの貴重な知識、技術や体験は幕末から明治にかけての日本の開国に多大なる影響を与えました。彼は意図してアメリカに渡ったわけではありませんが、自己の才覚をもとに場所場所でうまく適応していきました。さらに危険を冒しながらも鎖国時代の日本に帰国し、優れた語学能力と当時の日本人が持っていなかった高度な知識により、重用されました。そして、42歳のとき明治政府の命を受け、後の東京大学となる開成学校の教授にも就任しました。ジョン万次郎はそういう風に常に死中に活を求め、自分の道を切り拓いた人なのです。いま我々が目を向けるべきは地球全体に住んでいる人類全体です。その中でひとりの日本人としての^{きょうじ}矜持を持ち、個性を活かして、是非ともジョン万次郎のように自分の運命を切り拓いていていただきたいと思えます。

さて、皆さんのこれから歩む人生において一層の知識や経験が必要となる時がやってくるかもしれません。その際には、皆さんが学んだこの京都大学を思い出し、基本に立ち戻ってください。それは純粹に知を求めるということです。異分野、異文化、あるいは自分とは全く異なる専門家とできるだけ接し、分からないことを素直に恥じずに質問をし、自分の糧として吸収することです。ご存じの方も多いと思いますが、『論語』の為政篇に、「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり。(知之為知之、不知為不知、是知也)」という言葉があります。分かっていることと分かっていないことを明確にすることで、予想もしなかった角度から光がさし、新たな可能性を見つけ出すことができるでしょう。また、大学を思い出すだけでなく、折に触れ母校を訪れてください。皆さんと京都大

学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生の基軸になりたいと思います。

国家の危機的な財政状況や国難ともいえる大震災の下、本学も改革待ったなしの状況に立たされています。京都大学は今後一層努力を重ね、常に物事の根源を見つめ、根源を解き明かそうとする大学、基本すなわち本を務むる大学として世界一をめざしたいと思っています。皆さんにおいても、母校を温かく見守り、ご支援いただきますようお願いいたします。

最後に『孟子』の中に「自ら^{かえ}りみて^{なほ}縮くんば、千万人と雖も吾往かん」という孔子の言葉があります。自分でかえりみて自分が正しいと確信できたら、たとえ相手が千万人の大勢あっても私は恐れずに進んでゆくであろうという意味です。この姿勢こそが本当の大勇であると述べています。本日学位を手になされました3,031名の皆さんにもこのような大勇を持って世界のリーダーとして道を拓いていかれることを願って、私の^{はなむけ}言葉とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

卒業式〔2012年度〕

2013（平成25）年3月26日

いづれ ところ しゅんふう べつり な
何の処か春風 別離無からん

唐詩選にもとられた^{せつぎょう}薛業の漢詩の一節です。春は別れの季節です。

本日、ご来賓の沢田敏男元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、名誉教授、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,826名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深く敬意を表するとともに、篤くお慶びを申し上げます。併せて、今日の卒業式を迎えるまでご家族ならびに関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。116年にわたる京都大学の歴史において、皆さんを含めた本学の卒業生の累計は194,001名となりました。

現在、社会は京都大学卒業生の皆さんに大いに期待しています。その背景には日本社会の置かれている状況の変化があります。ここ数十年くらいの傾向として、国際社会における我が国の地位の^{ちようらく}凋落が様々な点で指摘されてきました。

企業は市場のグローバル化に対峙し、グローバルな社会の中でどう生き抜くかということをも真剣に考えており、自衛手段の一つとして、従来以上に人材に活路を求めています。そのため一部には、諸外国からの採用も増えてきています。その中で日本人、特に京都大学の卒業生がこれから活躍していこうと思えば、より一層の専門性と幅広い教養、あるいはその人格そのものが問われることとなります。京都大学で学ばれた皆さんは学士という形で一種の保証書を授与されたわけですが、今後ともさらに精進を続けないとやがて時代に取り残されていくこととなります。

変化は悪いことばかりではありません。英国放送協会（BBC）が読売新聞等と実施した「世界に良い影響／悪い影響を与えている国」を調べる世界世論調査の結果が今年の5月に公表されました。世界22ヶ国で調査が行われ、対象となる17の国と地域について「世界に良い影響を与えているか」、それとも「世界に悪い影響を与えているか」が尋ねられました。結果として、世界に良い影響を与える国として、日本が1位となりました。これには東日本大震災後の日本人の絆を合言葉にした様々な助け合い、^{ともいき}共生の姿が広く世界に報じられたことが大きかったのではないかと思います。

その一例として、東日本大震災の後、約5,700個の金庫が警察署に届けられ、中の現金23億円の多くが持ち主に返されたことに欧米が驚いているという報道がありました。我が国には似たような話が沢山あります。私自身も京都での国際会議に出席したニュージーランドの研究者の知人に「財布を落とした」と国立京都国際会館で泣きつかれたことがあります。途方に暮れている彼の前で「ジタバタしなさんな、必ず出て来る」といっても、「現金が入

っているからそんなことはありえない」と彼の顔は晴れません。確かに、財布にはクレジットカード、免許証などの大切なものが入っており、大変困った状況でした。私は日本という国や日本人を心の中で信じながら、慰めの言葉をいうことしかできず、「何か力になれることがあれば、お手伝いします」と言って別れました。そのあと、すぐに彼から電話がかかってきました。「いやあ、ホテルに帰ったらちゃんと届いていました」。彼は世界中どこを探してもこんな国はないと大変感心していました。これは、かれこれ30年ほど前の話です。

今度震災後に同じようなことが各地で繰り返されたわけです。そのことに世界は驚きました。そして、日本と日本人を見直したわけです。このことに我々はもっと胸を張ってもいいのではないのでしょうか。

これから、大学院進学の皆さんは、専門ごとに分かれてさらに学術に磨きをかけていくこととなります。かの夏目漱石も指摘しているように、専門性の深化に伴ってややもすると視野狭窄に陥りがちとなるので、そうならないための格別の努力が重要となってきます。

一方、社会に羽ばたく皆さんは、職場では社会の様々な問題とこれから日々格闘していかねばなりません。いずれの道に進むにせよ、これから歩む長い人生において、大学生活において身につけた知識や体験ではまだまだ十分とはいええず、途方に暮れるような試練に数多く直面することでしょう。そこで私からこれから生き抜く皆さんに「シガク」をおすすめしようと思います。

皆さんは京都大学において一定の学力を身につけたと思います。しかし、これからも皆さんには学ぶことを絶え間なく続けてほしいと思います。多種多様な本を読み、自分の専門分野の周辺分野も含め、広い分野の知識を貪欲に吸収されることをおすすめします。これならただの「学びのガク」のすすめですが、皆さんには学問の力の学力と同じぐらい重要な第二から第四までの他の三つのガクを鍛えてほしいと思います。

二つ目のガクは額ひたい、つまり額の後ろにある前頭葉、すなわち、「額ひたい」の「額力がくりよく」です。創意工夫や思い遣りをつかさどるのが前頭葉と言われています。気持ちおもんぼかを慮る、つまりどういうことがまわりの人々に起こっているか、どういうことが自分の周辺の社会で起こっているかをイメージ豊かに思いを馳せる力が額力ひたいりよく、つまり「額力」です。今のような複雑な社会でリーダーとして活躍するには、知識だけではなく一種の知恵にあたるこの「額力」を鍛えないと、ひとりよがりとなり、周りの人とともにことを成すことは難しいでしょう。

三つ目のガクは、コミュニケーションを生み出す顎あごの力の「顎力がくりよく」です。これは雄弁のすすめではありません。雄弁でなくても、誠心誠意、真剣に意見を交換し合う力です。京都大学が「自学自習」の教育理念とともに大切にしてきた、「闊達な対話」の意義がここにあるといえます。相手の立場も理解しながらも、自分の主張はきっちりと論理立てて言えることこそが重要です。それに加えて、健康を維持しながら、立派な人間として活躍していくためには、食べる力、つまり良く噛む力も必要です。顎あごの力である「顎力」はそれにも関係します。昔から腹が減っては、戦はできぬなどといわれます。食べられないことは大変なことです。食べられる人は何も感じませんが、嚥下力が低下したり、十分噛みしめられなくなって

くると、まともなアイデアは生まれません。

最後のガクは、楽しむ力の「楽力」^{がくりよく}です。これから社会に出れば、色々な苦難が待ち受けていると思いますが、しかしどんな仕事でも、それを楽しいと思うか苦しいと思うか、イヤと思うかそうでないかによって大きく結果が違います。それゆえ、楽しめる力も鍛えておかねばなりません。学ぶ学力、思いやりと創造力のための額力、対話と健康のための顎力、楽しめる楽力、その四つの「ガクリョク」を鍛えることを忘れないようにというのが私からのシガクのすすめです。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さん、ときには母校を訪ね、語らい、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。

卒業して、社会で活躍される皆さんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍されることと思いますが、一方で母校である京都大学で研究教育を続ける友人の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる、世界に伍していける大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、学業を積み、身体を鍛え、ところを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じとり、闊達な対話を大切に、人生を楽しめる四つの「ガクリョク」を備えた粘り強い人としてご活躍されることを願い、学士の学位を授与された皆さんへの私の^{はなむけ}言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

学部入学式〔2013年度〕

2013（平成25）年4月5日

本日、例年よりも優しい薄緑の柳の新芽が風にそよぎ、桜舞うこの「みやこめっせ」に参集の3,025名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございませう。都大路にはすでに躑躅の花もところどころ見受けられ、厳しく長い冬を経て、雪解け後に様々な草花が一斉に開花を迎える北国の花畑を髣髴とさせる状況に、身のまわりの気象の変化を強く感じました。自然現象と同じく、人間社会も疾風怒濤のごとく変化しています。

ご来賓の長尾 真元総長、尾池和夫前総長、列席の副学長、学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学をお祝いしたいと思います。また、みなさんの日々の研鑽が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

2011年3月11日に起こった東日本大震災による国難は今なお続いています。国を挙げての復旧や復興はまだ途上にあると言わざるを得ません。被災地から離れた京都においても、長く心を寄せ、被災地の苦難を我がこととし、復旧と復興を積極的に支援し続けていかなければなりません。今、大学に入学するみなさんはこのことを肝に銘じ、自ら行いうる貢献を主体的に行ってください。

さて、みなさんは、入学後の様々な可能性に心躍らせ、今日を迎えていることでしょうか。これまで十分にできなかったスポーツや趣味、社会活動の機会や新しい友との出会いがみなさんを待っています。選択肢は無限です。みなさんはもしかすると、いわゆる「楽勝科目」で単位をそろえ、残りの時間は学生時代にしか出来ないことをやろうと考えてはいませんか。確かに大学生活で勉学以外のことに時間を費やすことは一つの選択です。しかし、勉学はそれにもまして重要なのです。『淮南子』に「時は得難くして、失い易し」とあります。世界で活躍している本学の卒業生と話をする、みなが異口同音に言うことがあります。「大学でもっと勉強しておけばよかった」。勉強なんていつでもできると今のみなさんは思っているかもしれません。先輩方もそう思ったのでしょうか。現代社会においては一生学び続けなければ、冒頭でふれた疾風怒濤のように変る社会の動きについていくことはできません。大学で学ぶことは将来を通じて学ぶ基礎となるものです。例えるならば、人間の歩みとともに蓄積されてきた知識の宝庫を開く鍵を手に入れることが、これまで受けてきた教育以上に、大学での学び、とりわけみなさんが直ちに受ける教養教育によって可能となるのです。そして、そのような基礎作業は頭が柔軟なうちが効果的で、その果実は時間をかけて徐々に熟成していくものなのです。みなさんの人生の基礎を築く時間は、今を除いては、実はそんなにありません。京都大学としては、この4月から国際高等教育院を設置し、教養教育の改善に着手します。試行錯誤しながら、最善の教育をめざし、大学はこれからも変わっていきます。その過渡期に入学したみなさんは、易きに流れずに、しっかりと勉学に勤いそんでほしいと思います。

大学生になって、今日からみなさんは新たな経験を様々にしていくことでしょうか。しかし、

クラブ活動であれ、授業であれ、書物を通じた経験であれ、経験というのはいくら積んでも、そのままではその人を変えるものではありません。経験を自分で咀嚼し、消化し、同化する能力をつけないと自分のものとはならないのです。同じことを経験しても、ある人はそれを糧に伸びる場合もありますし、全然変わらないこともあります。知らず知らずのうちに半可通になって、むしろ退歩する人さえいます。やはりそこには、自分を向上させたいと思い、自分を鍛え、他人に頼ることなく、自分自身に^{たの}恃む、自鍛自恃の気概がないと経験はわがものにはならないと思います。

現在、京都大学にはおよそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学で出会い、そこで育まれる人間関係は、きっとみなさんのこれからの人生を豊かなものにするでしょう。学業のみならず、課外活動やその他の出会いを大切に、生涯の知己を得、多くの人々と自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。人間は己が考えるほどには、一人では何もできないものです。取り巻く周りの環境によって大きく左右されるのです。それゆえ、親友に巡り合う、あるいは良い書物に巡り合うための努力を積極的にする必要があります。また、ひとりで努力しても解決できないことはたくさんあります。運、不運もあります。人から間違った方向に感化されてしまうことさえあるかもしれません。そのようなとき、常に人間関係も含め、自分の置かれている環境や自らを省みることが重要です。そして、その中から自分で確信の持てるものだけを選び抜き、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を形づくり、それに肉付けし、今と違う自分を確立してほしいと思います。「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」。後輩もすぐあなた方につづきます。時の移ろいはみなさんが考える以上に早いものです。

また、知識は危ないということを忘れないでください。今の社会を生きるためには知識は確かに必要ですが、知識をそのまま金科玉条の如く信じてしまうことは危険です。特に私はインターネット時代の今、それを強く感じています。レポートを課すと、インターネット上の情報などをコピーアンドペーストして、全員同じようなレポートを提出するといった笑えない状況が日本各地で起こっているそうです。そして、考えない。知識や情報が増えれば増えるほど、人間は考えないようになってきているのではないかと思います。それゆえ、溢れ出る情報を取捨選択する力、これをつけるのが大学において最初に学ぶべき事柄ではないかと思います。選択のうえ、自分の頭で常に考えてほしいと思います。

併せて、みなさんは時代が要請する国際性を養う必要があります。それは単に外国語ができるということではなく、歴史に学び、自国の文化をしっかりと背景に持ちながら、自分の考えを国際社会で主張できる論理的な思考能力、発信能力、自分の意見を恥ずかしがらずに言える積極性や自主性を備えることにほかなりません。そのためには練習や経験も必要です。ぜひ大学時代に、十分に練られた計画と準備のもと、海外留学を経験してほしいと思います。大学として体制を整備し、みなさんの雄飛をできる限り支援したいと思います。

Adversity makes a man wise.

多くのみなさんはこの英語のことわざをご存知かと思います。日本語では、「^{かんなん}艱難汝を玉にす」と訳されて人口に^{かいしや}膾炙しています。私は、みなさんがこれまで十分に艱難を経験する機会に恵まれなかったのではないかと真面目に心配しています。これまで困難な目に遭わなくて幸せだと思っているでしょうから、「困難な目に遭う機会に恵まれない」という私の言葉を聞いて、不思議なことを言うものだと思われ首をかしげている人もいるかもしれません。みなさんの同級生にも失恋したり、勉強についていけないと思って、やめたり、挫けたりした人もいたと思います。親の経済的困窮で進学を断念した人だっていたはずですが。世の中は自分が引き起こした艱難ばかりではなく、不可抗力的に被らざるを得ない艱難に満ち溢れています。艱難はあらゆる場所で口を開けて人を待ち構えているものなのです。艱難を乗り越える力は、過去に艱難を乗り越えた経験によってのみ鍛えられます。多分ここにいるほとんどのみなさんは、大きな艱難にこれまで遭遇できなかったことでしょう。艱難に遭遇、乗り越えた人は強くなります。イギリスの詩人オリバー・ゴルドスミスは「私の最大の光栄は、失敗しないことではなく、失敗するたびに起きあがることである」と言っています。確かに多く的人是は起きあがれません。再挑戦できないのです。乗り越え、何度でも再起する粘り強さをみなさんに持ってほしいと思います。「堅き樫の木より、しなやかな柳のごとくあれ」という言葉を贈ります。

最後に、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、今後大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日も臨席のご家族や関係者のみなさまには、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。入学生のみなさんは、大学における様々な機会を生かし、澁刺と輝く京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。

大学院入学式〔2013年度〕

2013（平成25）年4月5日

本日、京都大学大学院に進入学される修士課程2,269名、専門職学位課程328名、博士後期課程879名のみなさん、おめでとうございます。列席の副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、研究所長、および教職員とともにみなさんの進入学をお祝いしたいと思います。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

我が国は、平成23年3月11日に東日本大震災に見舞われ、この国難からの復旧や復興の長く苦しい道のりを歩んでいます。国を挙げての復旧や復興の終わりの見えないこの時期に大学院で学ぶことを、みなさんは片時も忘れてはなりません。そして、我々は被災地から離れた京都においても、被災地に長く心を寄せ、その苦難を我がこととし、大学人として、また個人として、被災地を応援する決意をここに新たにしたいと思えます。

さて、みなさんが進む修士課程では、学士課程で身につけた知識や教養に加え、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身につけるなど、専門家として独り立ちできるよう体系的な教育が行われます。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う新たな教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍しうる人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信していくよう指導が行われます。これら大学院において、みなさんは専門家として一日も早く自立しうるように研鑽を積んでください。

『徒然草』の第51段に、「^{よろず}方に、その道を知れる者は、やんごとなきものなり」とあります。これは専門家への敬意を表したものです。みなさんの修められた学士は、素直に読むと学問を一定程度学んだ人と読めます。修士というのは一定の学業を修めた人。するとその上の博士は、幅の広い博学の士であり、広範な学問を修め、それに叶った行動もできる人であるとの印象を世間に与えます。例えば「文学博士」などと言われると、文学全般に渡って暁通した人が想像されることでしょうし、世間はそう期待していると思えます。ところが実態はどうでしょうか。博士の実態は逆に狭い士、「狭士」になっているのではないのでしょうか。あるいは深いだけの「深士」や細かいだけの「細士」に。ただし、これは学位取得者の責任というよりも、むしろ現代の学問が抱える問題かもしれません。現在、学問はますます専門分化し、針の先ほどの細かい専門事項を教育課程において咀嚼させなければならなくなってきました。そこまで学問は深くなってきているとも言えます。それゆえ、研究室に入ると、研究室が扱っている問題の最先端の研究をすすめられる傾向があります。また、研究室でやっている以外のことで論文を書くと言うと、指導教員にいい顔をされないかもしれません。私自身、京都大学工学博士を授与されていますが、機械や土木や化学も細かいことは分かりません。人よりもわかっていると思うのは、電波や電磁気分野で、これは専門

に近かったからです。それゆえ、工学博士というより、スペースサイエンスのプラズマ物理学博士なら、私は自信を持って「そうです」と言えるにすぎないのです。

人間観察の達人である吉田兼好は、『徒然草』の第167段で、「一道にも、真に長じぬる人は、自ら、明らかに、その非を知る故に、志、常に満たずして、終に物に誇る事なし」と続けています。これを聞いて、みなさんは無知の知を説いたといわれるソクラテスを連想されるかもしれません。新しい知識を多く授けることが教育ですが、学問はその範囲を自ら規定することで、新しい知識を受け付けにくくしていく側面が本来的にあります。教育によって柔軟にならなければならない頭が、特定の枠組みで考えるトレーニングを積むことで、しなやかさを失ってしまう恐れがあるのです。そうすると課程が進むにつれ、専門知識は増えるものの、現実に対して一種の拒絶反応を示すようになってきます。行きつく先は、人間だれしもが活用すべき人生の英知すら忘れ、末端、些末にとらわれる、夏目漱石の黒人と書いた「クロウト」の誕生です。兼好の言葉は、慢心しがちで、人を見下しがちな人間の本性を強く戒め、真の専門家の真骨頂を伝えるものです。みなさんにぜひ覚えておいていただきたい珠玉の言葉です。

さて、専門家の危険について述べてきましたが、これからの大学院での努力は社会的には無益なものなのでしょうか。まったくそうではありません。例えば、今の私が、研究を含め、他の分野で何かを求められたとすると、改めて勉強をし直さないとなりません。しかし、私は、専門を持たず、知の脈を深掘りしたことのない人間ではありません。思いつきでものを言う批評家でもありません。ある程度まで一つの事柄を深めて考究していくと、その深化に用いられた論理思考などの手法がおのずから身についていて、そのため新しい分野を学ぶ上ではるかに要領がよくなっているはずなのです。このことは経験の重要性を示しています。知識はせいぜい10年、20年もつだけです。知識は累積的に増えていきます。大学院においては、知識以上に学ぶプロセスこそが重要で、同時に世界の人達がどんな風に競い合って、今の知識を形づくってきたかを自己の専門で、国際学会などを通じて体験しておくことは大変重要なことだと思います。専門知識を身につけておくことは必要ですが、向き不向きが多少はあると言っても、それは例えば、石を積むようなものですから、コツコツやればいつか必ずできます。一方、豊富な経験を経るということは、あらゆるチャンスをつかえて意識的に努力しないと不可能です。本学には大学院を中心にして約1,800名の留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学術交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の多様な機会が準備されています。また、多くの京都大学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に広げて、ぜひ積極的に海外に雄飛してほしいと思います。

京都大学は物事の根源を尋ねること、すなわち「務本」を志向する大学であり、本質は何であり、それはなぜかということが常に議論されます。これからの大学院での時間を生かし、みなさんのみずみずしい感性でなぜかを問う研究の真の面白さを味わい尽くされることを期待しています。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない

気概を持ったリーダーを必要としています。我が国あるいは人類の未来は我々自らの手で拓かねばなりません。みなさんが、京都大学の大学院生として、さらなる高みを目指し、既成概念にとらわれず、常に「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくと同時に、自鍛自恃の精神で自らの心身を磨いていかれることを願い、私のお祝いのことばといたします。

みなさんの活躍を期待しています。大学院進入学、おめでとうございます。

博士学位授与式〔2013年度〕

2013（平成25）年9月24日

本日、博士の学位を授与される193名の皆さん、おめでとうございます。その中には38名の女性と72名の留学生が含まれています。京都大学の博士号取得者は累計40,364名になりました。列席の副学長、研究科長、学館長、学舎長をはじめとする教職員一同、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

さて、学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、晴れやかな気持ちでこの学位授与式にご臨席いただいているものと推察いたします。学位を授かる皆さんが今日の日を迎えられたのは長年にわたって支えてくださった皆様のおかげです。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様の様々なご苦労やご支援に対して篤く御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと存じます。

学位を授与される皆さんに私から次の言葉を贈りたいと思います。

「Impossible n'est pas français.」

これは「余の辞書に不可能の文字はない」で人口に膾炙しているナポレオンの言葉の元ともいわれる言葉なのですが、直訳すると不可能ということはフランス的ではないとなります。なぜナポレオンはこの言葉「Impossible n'est pas français.」を口にしたのでしょうか。これは全権を掌握した皇帝が生み出した一種の妄想なのでしょう。私はそうではないと思います。むしろナポレオンの人への深い洞察がもたらした一つの警句、すなわち真実をついた巧みな言葉ではなかったかと思います。それは「こんなこと自分にできないかもしれない」という思いが脳裏をよぎった瞬間に全ての可能性の芽が摘まれてしまうことを恐れよということと言いたかったのではないかと思うのです。すなわち、できないかもしれないと躊躇う、逡巡するという気持ちが人の伸びるべき、あるいは伸ばすべき事柄を全て潰してしまうことを戒めたものでないかと思います。

皆さんには研究を例にとるとわかりやすいでしょう。研究というのは「研（みが）き究める」と書きます。何度も何度も研ぎ、問題が見つかったらまた研いで最終的に納得できる仕上がりまであきらめない。これはとてもストイックな過程ですが、重要なことは、達成するまで諦めず、やり通すことです。人はできない理由を見つけだす天才です。資金が足りない、人員が足りない、時間が足りない、自分の能力ではできない、一人ではできないなど、いくらでもできない理由を創造力豊かに考えつくことができます。あるいは「こんなこと本当に出来るのか」、「こんなことを考えて人から揶揄されないか」。そういう気持ちを持った時点で、ほとんどが駄目になります。もう不可能を自認したようなものです。そうするとファイトも湧かず、新しいことをやろうという前向きな気持ちも萎えてしまいます。重要なことは、臆病になったり、躊躇ったりせず、頑張ってみることです。「やってみよう」と「やっ

てみせる」ということは違いますが、その「やってみよう」と「やってみせる」との間に一瞬たりとも疑いを挟まないことが大切なのです。これはまさに気持ちの問題でしょう。ナポレオンはそのことを深く自覚し、事を成す人は不可能など考えるべきではなく、事を成さんとする同胞に、不可能を口にするには「フランス的でない」と婉曲に戒めたのではないのでしょうか。

皆さんはネガティブな見方を排除し、これまで鍛え上げてきた自らを信じ、幾多の苦難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を本日、京都大学博士の学位の授与という形で認められました。とりわけ留学生の皆さんにとって、言葉や文化の異なる異国で学を修めるということは並大抵の努力でできることではなかったでしょう。私は皆さんの長年にわたる研鑽を大いに称えたいと思います。193名の皆さん、今後は誰にも臆することなく、先人、何するものぞとの気概を胸に、個性を発揮し、修めた専門を生かして、東日本大震災以来これからも続く日本の再生の営みにおいてその使命を果たして下さるよう期待しています。

また、私は学問とは真実をめぐる人間関係であると信じています。皆さんには、人の苦しみや痛みを知り、相手の立場や状況をよく斟酌できる人として、研究成果の華のみならず、さらに豊かな人間関係の華を咲かせるような人生を歩んでほしいと願っています。

同じナポレオンが、中国が目覚める時、世界は震撼するだろうとっています。その意味するところは、単純な現在の中国の躍進を意味しているのではないでしょう。むしろ西洋とは異なる伝統や思想を持つ中国を含むアジアの時代がやがてやってくることを彼の慧眼は見抜いていたのではないのでしょうか。どんなに科学技術が進歩しても、アジアには、自然と人間、人間と人間の調和を重視する東洋思想の考え方が基礎にあります。どのような局面においても調和ということは必要で、いくら科学技術が発展をするにしても、人が係る限り、一定の節度を伴った調和が必要となることは明らかです。いうなれば哲学的なブレーキをかけながら、科学技術を確実に進めていくということが求められる時代になってきたということです。そういう時代をあなた方は生きるのです。自然との調和、あるいは自分が向き合う対象と主体である自分との調和ということが今後は一層重要となり、研究者であってもそれは忘れてはならないことなのです。そして、我々アジア人はそのことを自然と考えることができる基礎を持っています。そのようなアジアの強さをナポレオンが予見したというのは言い過ぎでしょうか。皆さんには、自分の専門分野のみならず、淮南子に出典を持つ、時空、すなわち時間と空間の両方にまたがる概念である「宇宙」との調和ということを常に考える視野の広い研究者になっていただきたいと思います。

そして、これからも折に触れ母校を訪れてください。皆さんと京都大学との縁（えにし）は、同窓会や生涯の学びを通じて続いていきます。京都大学は皆さん一人一人の人生を支える確かな基軸になりたいと思います。一方で、皆さんも母校を温かく見守り、欧米の主要大学が寄附を通じて独自財源を築き、その自立性と発展性を確保していることにも倣い、ご支

援いただきますようお願いいたします。さらに、過去の留学生の中には、母国に帰られ、海外に23ある地域同窓会組織を通じて、京都大学や日本と母国を結ぶ「人の架け橋」として活躍されている人もますます増えています。皆さんにもぜひ同窓会にご加入いただき、京都大学、ひいては日本との絆を一層充実させていただきたいと思えます。

最後に、本日学位を手にされました193名の皆さんが、持てる力のすべてを生かしきり、これまでの研鑽の過程で培われてきた豊かな人間力を大いに発揮し、世界のリーダーたるべくさらに高度な教養を身につけ、いきいきと活躍されんことを願い、私の餞（はなむけ）の言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

大学院学位授与式〔2013年度〕

2014（平成26）年3月24日

本日、京都大学から修士の学位を授与される2,169名の皆さん、修士（専門職）の学位を授与される157名の皆さん、法務博士（専門職）の学位を授与される150名の皆さん、博士の学位を授与される551名の皆さん、誠におめでとうございます。

学位を授与される皆さんの中には、706名の女性と320名の留学生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した修士号は69,988、修士号（専門職）は1,073、法務博士号（専門職）は1,572、博士号は40,915となります。ご来賓の沢田敏男元総長、名誉教授、列席の副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、研究所長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

この会場には、学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様が多数お集まりのことと思います。学位を授かる皆さんは、これらの方々からの長年にわたる支援に対して感謝の気持ちを、きまりが悪いなどと思わず、素直に表してください。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様方の様々なご苦勞やご支援に対して御礼を申し上げ、今日の喜びを分かち合わせていただきたいと思います。

さて、皆さんは幾多の困難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を本日、京都大学学位の授与という形で認められました。これからは何ものにも臆することなく、授けられた学位を誇りとし、身につけた専門を生かして、我が国や人類が直面する多岐にまたがる複雑な問題に果敢に挑戦し、社会のリーダーとしてさらなる飛躍を遂げてください。

さて約8年前の2006年7月のことになりますが、元国際電波科学連合会長として、私は専門の電気工学の天才ニコラ・テスラの生誕150年を祝う式典に招待され、クロアチアを訪問する機会を得ました。トーマス・エジソンは蓄音機や白熱電球や映画などの発明で知られていますが、そのエジソンとテスラは同時代に活躍しました。テスラは、電気の魔術師ともてはやされながら、その後忘れ去られたセルビア人です。近年テスラの復権が進み、磁場の国際単位として、大数学者ガウスに代わり、その名が採用されています。交流電力システムは現代社会で当たり前で必須のものとなっている重要な社会基盤ですが、その交流電力システムはテスラの発明によるものであり、情報化社会の基盤である無線通信の発明もテスラに帰されます。テスラと発明王エジソンは互いに同時代を生きた発明家として、交流対直流という電力戦争を繰り広げましたが、1915年には、テスラとエジソンはノーベル物理学賞同時受賞とのニューヨークタイムズ紙の事前報道で世間を驚かせました。しかし、結局両者とも受賞には至らず、数々の両者をめぐる人間臭い風聞が生まれました。

そのエジソンによるものとして、「天才は1%のインスピレーションと99%の努力である」という言葉が人口に膾炙かいしやしています。これに対して、エジソンの会社で働いていたテスラは、「エジソンが干草の山から針を一本見つけようとする、やおら麦藁を一本一本丹念に調べはじめ、探しているものが見つかるまでミツバチのような勤勉さで働き続ける。私な

らほんのわずかな理論と計算とでエジソンの労力の90%が節約できるので、そのような行動を気の毒に思いながら見ていた」ともいっています。皆さんはこれを聞いてどう思われるでしょうか。

テスラはエジソンに一種の不満を持っていたのだと思います。エジソンはまさに「必要は発明の母」を地で行く実務家であり、世の求めを先取りし、ふつふつと湧き上がるアイデアを既存の技術に注ぎ込み、発明品として仕立て上げるアイデアマンでした。一方、テスラは豊かな構想力をもとに、学術的にしっかりとした一からの積み上げで、体系的に思考し、将来展開できるような基礎を発明として世に問いました。エジソンのように既存の技術の工夫や組み合わせによって目の前にあるニーズを矢継ぎ早に満たしていくことも重要ではありますが、長い目で見ると基礎を持たないアドホックなやり方は先細りしてしまうおそれが高いともいえます。

日本においては、近年イノベーション待望論が騒がしいくらいですが、イノベーションというのは本来テスラのように強固な基礎を築いてこそ、将来の大きな展開が可能となるものです。テスラは交流電力システムや無線通信にとどまらず、後にコンピューターやミサイルやロボットに繋がる発案も行いました。これこそが日本が目指すべきイノベーションの姿であり、学術に基づくイノベーションの実現に日々取り組むのが研究であるということをご皆さんにも心していただきたいと思います。さらに、責任をもって研究を進めるといふ大学の果たす重要な役割について社会にもぜひ正しく理解してほしいと願っています。

さて、今日お集まりの皆さんは、学校と名のつくところには3か月しか通わなかったとされるエジソンとは異なり、テスラと同じように高等教育を修め、胸を張って基本は大丈夫といえるでしょう。しかし、確かに皆さんが学業を修めた専門分野に関連する部分においてはそうかもしれませんが、これから社会においては、予想もできない様々な問題に皆さんは直面することになります。そこではエジソンとテスラのどちらのアプローチが正しいかはわかりません。場合によってはその両方を同時に行う必要があるのかもしれませんが、いずれにせよ、次のように考えていいと思います。学位取得の道程で、高度な専門知識を修め、その分野の最先端までたどりつき、新しいものを切り拓いたプロセスとそれを実現させた志と力量があれば、新たな領域においてもその経験が自信と指針となって道は拓けるのです。これが研究によって己を磨く高等教育の力であろうかと思えます。

さて、皆さんのこれから歩む人生において一層の知識や経験が必要となる時がやってくるかもしれません。その際には、皆さんが学んだこの京都大学を思い出し、基本に立ち戻って下さい。また、折に触れ母校を訪ねてください。皆さんと京都大学との縁は、同窓会や生涯の学びを通じて切れることなく続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生の基軸になりたいと思います。京都大学は、時流に流されず、常に物事の根源を見つめ、根源を解き明かそうとする大学、基本すなわち本を務むる大学として輝き続けていきたいと思っています。皆さんにおいても、母校を温かく見守り、ご支援いただきますようお願いいたします。

本日学位を手にされました3,027名の皆さんが世界のリーダーとして道を拓いていかれることを願って、私の^{はなむけ}言葉とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

卒業式〔2013年度〕

2014（平成26）年3月25日

本日、ご来賓の沢田敏男元総長、名誉教授、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,831名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深く敬意を表するとともに、篤くお慶びを申し上げます。併せて、今日の卒業式を迎えるまでご家族ならびに関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。117年にわたる京都大学の歴史において、皆さんを含めた本学の卒業生の累計は196,900名となりました。

さて、皆さんが入学された時にはひとりひとりが夢を抱いていたことと思います。その夢は人によって、大願成就を目指す極めて野心的なものから、具体的現実的なものまで様々であったかと思えます。それを胸に本学の門をくぐり1年、2年と経つにつれ、やがてその夢が段々と霞んだり、変形してきたこともあったでしょう。そしてそれぞれの夢は、新たな装いをまとったり、新しく生まれたりして、入学時とは大きく変わっていることでしょう。私は皆さんの夢の変容に対して、苦言を呈するつもりはありません。むしろそれこそが皆さんの成長そのものであり、その成長を大いに言祝ぐものです。それと同時に、入学時の皆さんの夢というものをここでもう一度思い返して、己を見直し、自分自身で今の夢に向けてcommence、すなわち始動する日が、今日の卒業式commencementであるということを心してほしいと思います。

皆さんは京都大学において一定の学業を修められ、今日の卒業式に臨んでいます。

高浜虚子に

「一を知って 二を知らぬなり 卒業す」

という俳句があります。皆さんには「一を知りて二を知らず」ということを脱し、さらに無知の知に目覚め、これからも止むことなく学び続けてほしいと思います。多彩なジャンルの本を読み、自分の専門分野のみならず、広い分野の知識を貪欲に吸収するように心がけてください。

現在、我々はインターネットに容易にアクセスできる環境にどっぷりつかっています。ここでは単純な問題については、答え探しに、大きな努力も必要とせず、検索という形で容易にできます。言い換えると我々は安易な答え探しが可能な世の中に生きているといえます。一方、答え探しが容易にできない問題に直面する場合も多々あります。さてどうすればいいのでしょうか。本当に我々を悩ます問いは本来そのようなものです。その時には私たちは自分の頭で考えるしかありません。考えるとは一体どういうことでしょうか。私は、考えるということは、様々な事柄の可能性や繋がりを新たに組み直し、自分の頭の中で整理するというのではないかと思っています。すなわち、問題を前に、頭の中にこれまで蓄積してきた知識や経験を組み替えることこそが、考えることの本質ではないかと思えます。このプロセスは一種パラレルな処理です。一方、インターネットから入手できる情報は、順に発見できるシリアルなものです。この違いが、いくらインターネットに向かっても、考えていること

にならない最大の理由ではないでしょうか。インターネットのようにシリアルに一つずつ情報が出てき、それが片付いたら、次、そして次という形式は物事を調べる時には非常に役立ちます。ある特定の事柄についての知識を得たいときにはとりわけそうです。一つずつ知識を積み上げていくということはそれ自身大変重要ですが、何か全く新しいことを考えようとすると、本来ばらばらに分類されていた異なる分野の知識を組み合わせるパラレルな処理が必要で、脳の中ではそのパラレル処理が、ニューロンとニューロンの繋がりという形で行われています。それゆえ、色々なことを体験し、経験し、知識を蓄え、それを柔軟に組み合わせ、組み替え、新しいものを創造する訓練を積む必要があるわけです。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、新しい夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんには、ときには母校を訪ね、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として、京都大学を人生の基軸としてこれからも積極的に活用していただけるように願っています。

卒業して、社会で活躍される皆さんには、機会を与えられた様々な場所で、本学で身につけた自学自習の精神を活かし、活躍されることと思いますが、一方で母校である京都大学で教育を受け、探究を続ける友人の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、京都大学は、優秀な人材を活かし、グローバルに評価される大学でありつづけるように、必要となる環境改善に尽力してまいりますので、一心不乱に研究に打ち込んでくださるようお願いいたします。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、学業を積み、身体を鍛え、こころを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じとり、闊達な対話を大切に、ご活躍されることを願います。学士の学位を授与された皆さんへの私の^{はなむけ}餞として、自らを十分に鍛え、自ら責任を持って、自身の中にあるものに頼るという「^{じたんじじ}自鍛自恃」という言葉を贈ります。

本日は誠におめでとうございます。

学部入学式〔2014年度〕

2014（平成26）年4月7日

本日、疏水の碧に映える満開の桜に彩られたここ「みやこめっせ」に参集の3,024名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、列席の副学長、学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学を心よりお祝いいたします。同時に、みなさんの日々の研鑽が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまにお祝いを申し上げます。

平成23年3月11日に起こった東日本大震災による国難は、3年を経て、今なお続いています。国を挙げての復旧や復興はいまだ途上に過ぎず、福島第一原発事故はその収束の目途すら十分にたっているとは言えません。被災地から離れた京都においても、長く心を寄せ、被災地の苦難を我がこととし、復旧と復興を積極的に支援し続けていかなければなりません。今日、本学に入学するみなさんはこのことを肝に銘じ、自ら行いうる貢献を改めて考え、主体的に行動することを希望します。

さて、みなさんは、入学後の様々な可能性に心躍らせ、今日を迎えていることでしょうか。多くの京都大学OBの皆さんが、好きなことに贅沢に時間を使えたのが大学時代であったとその自由を懐古します。サークル活動やボランティア活動や趣味などに没頭できることは大学生活の一つの側面です。しかし、いま勉強することはそれにもまして重要なのです。

世界で活躍している本学の卒業生と話をする、みなが異口同音に言われます。「大学でもっと勉強しておけばよかった」。みなさんは厳しい学力検査を経たばかりで、勉強なんてもうこりごりと思っているかもしれません。また、長い人生のうちで勉強などその気になれば、いつでもできると思っているかもしれません。先輩方もまたそう思ったのでしょうか。しかし、それならどうしてやがて同じような後悔を多くの人が口にするのでしょうか。

そもそもみなさんは、なぜ勉強しなければならないのでしょうか。勉強している最中にはその理由はなかなかわかりにくいものです。一つには次のように考えられます。大学で学ぶことは将来を通じて学ぶ基礎となる。すなわち、人間の歩みとともに蓄積されてきた人類の英知の宝庫を開く鍵を手に入れることが、これまで受けてきた教育以上に、大学での学び、とりわけみなさんの直ちに受ける教養教育によって可能となります。そして、そのような基礎作業は頭が柔軟なうちに体系的に済ませておくことが極めて効果的で、その過程は樹木が時間をかけて徐々に生長することに似て、それなりの時間と集中を要するのです。確かに現代社会においては、一生学び続けなければ、日々変わりつづける社会の動きについていくことすら難しいでしょう。そして、大学生活を除いては、この学びの基礎を築く時間は、実はほとんどないことが、年を経るにつれしみじみと痛感されるといったところではないでしょうか。

しかし、私は学問をするということはそれだけではないと思っています。江戸時代の教育について書かれた本を^{ひもと}繙くと興味深い事実気がつきます。それは日本各地に存在した寺

子屋の多さです。昨年度の学校基本調査によると現在小学校は全国に21,131校ありますが、江戸時代の末期にはこの数を優に超える寺子屋が我が国にあったと推測されています。これはある意味不思議なことです。科挙制度のあった中国とは異なり、勉強したからといって、そのことで日本では直ちに自己の立身出世に役立つわけではなかったのです。なのに、民間の寺子屋が我が国の津々浦々にあった。そして、寺子屋では、立身出世といった何かの「ため」に学問をするのではなく、他の大事な機能が期待されていたのではないのでしょうか。最近、江戸時代中期に活躍した思想家石田梅岩の「都鄙問答」に「仏老莊ノ教エモ、イハバ心ヲミガク、磨種ナレバ」という文章があることを知りました。すなわち「仏陀や老子や荘子の教えも、いわば心を磨くための材料、磨ぎ種なので」と言っているのです。すなわち、勉強することには、学問によって自分を磨くことが期待されてきたというわけです。この教育観は、武術や芸術といった様々な技芸にすら理想形への道のりである道を見出し、その道を求め、求道し、人として完成することを志向する我ら日本人の姿にうまく重なります。

また、読み・書き・そろばんや人としての矜持といった当時の初等教育の充実が、明治維新後に西洋の先端技術を直ちに吸収同化できた素地でもありました。そして、西欧列強に肩を並べるために、急速に進めざるを得なかった教育体制の整備は、健全な競争を通じ、適材を広く集めることに当初は成功してきました。しかし、一方で学問によって身を立てるという風潮をもたらしてしまいました。この傾向は大学が大衆化した現在、その勢いをさらに増しているように感じられます。いまこそ、江戸時代から連綿と続く、学問によって心を磨くという日本人の大切にしてきた考えを思い起こすときです。みなさんにも大学において学問を通じて心を磨き、人として成長していただきたいと思います。

さらに、みなさんは時代が要請する国際性を養う必要があります。それは単に外国語ができるということではなく、歴史に学び、自国の文化や日本人の矜持をしっかりと背景に持ちながら、自分の考えを国際社会で主張できる論理的な思考能力、発信能力、自分の意見を恥ずかしがらずに言える積極性や自主性を備えることにほかなりません。そのためには練習や経験も必要です。ぜひ大学時代に、十分に練られた計画と準備のもと、海外留学も経験してほしいと思います。大学として体制を整備、充実させ、みなさんの雄飛をできる限り支援したいと思います。

最後に、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を一層充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者のみなさまには、引き続き、本学へのご支援や応援を切にお願い申し上げます。

入学生のみなさんには、芭蕉の次の句をお贈りします。

としどしや 桜をこやす 花のちり

今日から始まる大学生活において素晴らしいときを過ごすとともに、自身の経験を肥やしとし、美しい花を毎年咲かせ、その繰り返しによって大木となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、誠におめでとうございます。

大学院入学式〔2014年度〕

2014（平成26）年4月7日

本日、京都大学大学院に進入学される修士課程2,210名、専門職学位課程324名、博士後期課程898名のみなさん、おめでとうございます。列席の副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、および教職員とともにみなさんの進入学をお祝いしたいと思います。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

平成23年3月11日の東日本大震災からすでに3年が経過しましたが、この国難からの復旧や復興はまだ道半ばに過ぎません。とりわけ福島第一原子力発電所事故は収束の目途も十分に立っていないこの時期に大学院で学ぶことをみなさんは片時も忘れてはなりません。そして、被災地から離れた京都においても、被災地に長く心を寄せ、その苦難を我がこととし、大学人として、また個人として、被災地を応援する決意をここに新たにしてほしいと思います。

さて、みなさんが進む修士課程では、学士課程で身につけた知識や教養に加え、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身につけるなど、専門家に向けた体系的な教育が行われます。また初めての研究論文の執筆となる修士論文の作成を通じて、問題の発見から答えの導出に至る一連の過程を経験し、新しい価値の創造がいかに行われるかを体験することになります。この創造的な過程を経験しておくことは、社会で様々な問題を解決するためのよいトレーニングになります。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍しうる人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信できるように指導が行われます。博士後期課程は研究者を養成するだけではありません。日本では学界以外では、博士号を持っている人はまだまだそう多くはありません。一方、世界の政界・官界・実業界においては、博士号を持ったリーダーが颯爽と活躍していることはそう珍しいことではありません。研究といった創造的過程を経験し、新たな価値を創造しうるリーダー層が社会を変革していく、そのようなことが新たな世界標準になりつつあります。世界の舞台に躍り出、日本のさらなるガラパゴス化を止めるのはみなさんです。

これより、修士課程のみなさんは基盤を築くために、専門職学位課程や博士後期課程のみなさんは専門家として独り立ちできるように専門に没頭してください。没頭する時期が無ければ研究の突破力は生まれません。それがなければ花は開きません。

みなさんはこれから研究室に入って先生方と話をし、研究室の強みを十分理解した上で、自分は何をしようかと考え始めることになると思います。研究室に所属するということは時として、枠から外れないように自己規制を行う危険も秘めています。そもそも大きく外れるのであったら、違う研究室へ行っていたはずですが。その意味で、研究室のスタイルにある程度共鳴してその研究室へ行ったことになりませんが、そうするとその中での研究というの

は途端にかなり狭くなりがちです。そして、その限定された範囲で研究をしようと思ったら、それはかなり集中しないものになりません。みなさん同様に既に研究分野をかなり限定して頑張っている仲間や先輩が多数いるわけなので、追い付き追い越そうと思ったら、それ以上に集中し、没頭する必要があるわけです。それはそれで正しい選択でしょう。

しかし、没頭だけではいけないと私は思っています。没頭し、狭い専門に沈潜すると、外界が見えなくなるという弊害があります。このことは常に意識しておくべきことです。皆さんの多くはそのまま狭い領域を深く掘り進めていくと、狭い領域の専門家にはなれるかもしれませんが、知識の範囲が限定されてきます。そのために、研究が一息ついて、新しいことを始めようとする、専門以外のことを全く知らずに、今度は大きなハンディキャップを背負う恐れがあるのです。ある狭い専門分野で一生いける幸せな人もいますが、その可能性は一般に非常に小さいものです。選んだテーマがいつまでも陳腐化せず、斬新であり続けることは難しいので、一つのテーマに生涯を捧げることができた研究者は真に稀有な幸運をつかんだと言えるのです。変革の時代に生きる我々にとってはそうでないケースの方が圧倒的に多いでしょうから、一点突破のための集中と同時に自分の可能性を常に広げていく必要があるのです。

また、社会に出れば、いきなり新しいことをと言われることがあります。新しいことを切り拓くことが、自分には必ずできるという自信を持つためには、当然のことながら、専門分野を十分に修めておく必要があります。しかし、それだけでは十分とは言えません。

守破離という言葉があります。古くは室町時代の能や戦国時代の兵法に端を発するとも言われ、芸術や武道の上達の段階を表すとされます。「しゅ」は「守る」。「は」は「破る」。「り」は「離れる」。大学院に即して言いますと、研究室に入ってそこでの得意な研究スタイルを学び、研究室の強さを「守る」。すなわちしっかり専門を身につける段階。次に、研究室の実績を基礎に自己の工夫を加え発展させ、それまで解決できていなかった難問を打ち「破る」段階。最後は、視野を広げ、新しい分野に臨み、学んだことを「離れ」、独自に新しいものを創造する段階です。みなさんもこの「守破離」を心に刻み、段階が進むにつれて自分の視野を一層広げるように意識的に行動してください。

そして、このことは、大樹を育てることに似ています。確かにまっすぐ高く伸ばすためには、枝うちも必要ですが、それだけでなく、燦々と降り注ぐ太陽の光や豊かな栄養が必要です。自分という木を枯らさないように必要となる環境と栄養、すなわち頭の栄養となる知識を取り込めるような準備を常に行ってください。

本学には大学院を中心にして約1,800名の留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学術交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の多様な機会が準備されています。また、多くの本学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に広げて、ぜひ積極的に海外に雄飛してほしいと思います。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概を持ったリーダーを必要としています。我が国あるいは人類の未来は自らの手で拓か

ねばなりません。みなさんが、本学の大学院生として、自由の学風をよく咀嚼し、自らが蓄積した知識や世界の常識といった既成概念からも自由になって、「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくこと、さらに、自己を十分に鍛え、頼みとできるようにする自鍛自恃^{じたんじじ}の精神で自らの心身を磨いていかれること、この二つを願い、私のお祝いの言葉といたします。

みなさんの活躍を期待しています。大学院進入学、おめでとうございます。

博士学位授与式〔2014年度〕

2014（平成26）年9月24日

本日、博士の学位を授与される229名の皆さん、おめでとうございます。その中には65名の女性と70名の留学生が含まれています。京都大学の博士号取得者は累計41,145名になりました。列席の副学長、研究科長、教育部長をはじめとする教職員一同、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、秋の蒼空（そうくう）のようなすがすがしい気持ちでこの学位授与式にご臨席いただいているものと存じます。学位を授かる皆さんが今日を迎えられたのは長年にわたって支えてくださった皆様のおかげです。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様方のさまざまなご苦勞やご支援に対して篤く御礼を申し上げ、今日の喜びをともに分かち合わせていただきます。

学位を授与される皆さんは、日々の研鑽を通じ鍛え上げてきた自らを信じ、幾多の苦難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を京都大学博士の学位の授与という形で世に認められることとなりました。皆さんのうちでもとりわけ留学生の諸君は、言語や習慣の異なる異国で最先端の学を修めるということは並大抵の努力でできることではなかったでしょう。私は皆さんの長年にわたる研鑽を大いに称えたいと思います。

ただし、誤解しないでください。称えられるべきは学位論文そのものだけではありません。学位論文の成果は月日と共に陳腐化していくかもしれませんが、それは悔やむべきことではありません。重要なことはここに至る過程です。つまり、課題を見つけ、目標を定めて、研究を遂行し、その目標まで到達したその道程こそが、かけがえのない経験だったのです。まさにフロンティアの開拓に皆さんは第一歩を踏み出したといえるでしょう。敷かれたレールの上を走るのではなく、レールなき知のフロンティアを開拓しながら進む過程を、持てる才能をフルに発揮し、皆さんは見事経てきたのです。さて、これからどうすべきでしょうか。自らが敷きえたレールをそのまま延長するにとどまらず、その過程で身に付けた開拓力こそが学位の本当の意味するものです。新しいことにつかかって、悪戦苦闘しながら、障害を次々と乗り越え、成果を得る、その能力を対象を限定せずにこれからの人生で広く応用していただきたいと思います。それは、これから研究職に就く人も研究職を離れて社会のリーダーとして活躍しようと思っている人についても同じです。あなた方が得た学位はそのフロンティア開拓の過程を見事にやり遂げた才能と努力の証しとなるものです。

皆さんに今日ぜひ心に留めておいてほしい言葉があります。唐宋八大家の一人、蘇洵（そじゅん）の「管仲論」に出てくる言葉です。

「夫（そ）れ功の成るは、成るの日に成るに非ず。蓋（けだ）し必ず由（よ）って起こる所有り。」

つまり、成功は、その日一日で成し遂げられたわけではなく、それまでの積み重ねがあってこそはじめて実現します。さらに続けて。

「禍の作（お）こるは、作（お）こるの日に作（お）こらず。亦（また）必ず由（よ）って兆す所有り。」

一方、禍も突然起こるのではなく、注意していればその兆しがみえるものだということです。

蘇洵の言葉からは、他人の成功を羨まず、成功者がそれまで積み上げてきた努力に敬意を払い、ともに祝う余裕を持つべしということが読み取れます。また、我が身においては、自分の志を高く持ち、目標を定めて、必ずやるという信念で進み、成功に向けての傾注が必要であることを教えられます。一方、これからの長い人生、うまくいかない時もあります。あるいは世の中がうまくいっていないことを痛切に感じる時もあるでしょう。その時、禍が突然降りかかったと嘆いたり、起こってしまったから後知恵で批評するのではなく、必ず兆しがどこかにあったはずなのに見つけられなかったと反省することが重要です。さらに、社会にとっての大きな禍の兆しを敏感に見つけることこそが、これからのリーダーの備えるべき資質の一つであろうかとも思います。

今後、世界はますます小さくなります。皆さんのなかには、日本が窮屈に感じる人もいるでしょう。狭い日本に閉じ籠もらないで、世界に雄飛してほしいと思います。その際に注意しておくべきことがあります。文明や文化の熟度に応じ、人々の交際は洗練され、他人への配慮も細やかなものとなり、洋の東西を問わず、間接表現は豊かになっていきます。例えば、日本語では、嫉妬の感情は、恨み、辛み、妬（ねた）み、やっかみ、嫌味、嫉み、焼きもちなど多数表現し分けることが可能です。英語にも、jealousy、envy、covetousness、resentment、discontent、spite、grudge、green-eyed などさまざまな表現があります。一方、インターネットの世界では、「いいね！」があらゆる場所を跋扈（ばっこ）し、単純を旨とする割り切りが大いに力を得ている状況にも出会います。このような両極端にも見える状況においてもみなさんは、しなる木のように柔軟に人と接し、他人の気持ちを汲んで、花を咲かせるすべを身に付けてほしいと願います。この一種のデリカシーもこれからのリーダーの要件です。

皆さんと京都大学との縁（えにし）は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生を支える確かな基軸となるべきであると私は考えてきました。一方で、皆さんも母校を温かく見守り、さまざまなご支援をお願いします。とりわけ、留学生の皆さんには、母国に帰られ、海外に23ある地域同窓会組織を通じて、京都大学や日本と母国を結ぶ「人の架け橋」として活躍されている先輩の後に続いてください。そして、京都大学、ひいては日本との絆を一層太くかつ強くしてくださることを大いに期待しています。

最後に、今日は私の総長としての最後の学位授与式になります。6年間にわたり一心不乱に職務に打ち込んできたつもりです。その間、多くの方々にお会いし、楽しく仕事ことができました。とりわけ高い志を胸に社会に飛び出す皆さんに今日のように賤（はなむけ）の言葉を贈れることは私の最も喜びとするところでした。京都大学は素晴らしい大学であったと誇らしく思っています。諸君の今後の健闘を祈ります。

本日は誠におめでとうございます。